

平成 28 年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 9

—国庫補助事業に伴う発掘調査—

平成 29 年（2017 年）3 月



茨木市教育委員会

序 文

私たちの住む茨木では、北半部は老ノ坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査は全国的に減少傾向にあるのに対し、本市では緩やかながら増加しています。

本書は、平成 28 年度に実施した個人住宅建設工事に伴う発掘調査と、千提寺菱ヶ谷遺跡の範囲確認調査の概要報告書です。これら一つ一つを積み重ねた調査成果が、郷土茨木の歴史遺産として広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会

教育長 岡田祐一

例　　言

1. 本書は、平成28年度国宝重要文化財等保存整備費市内遺跡発掘調査等事業（総額12,747,120円の内、国庫6,373,000円、市費6,374,120円）として実施した、個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査及び、千提寺菱ヶ谷遺跡の範囲確認調査の概要報告書である。平成28年度として、平成28年4月1日から平成29年3月31日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から平成28年1月から同年12月末までに調査を終了したものを対象に報告する。
2. 調査の実施は、本市教育委員会社会教育振興課文化財係発掘調査員、川村和子、木村健明、黒田昂嗣、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、藤田徹也、正岡大実、水久保祥子があたり、川西宏実、川畑康雄、中川夕香、宮西貴史、吉田和弘がこれを補助した。
3. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、坂田が編集にあたった。ただし、第3章第2節は富田が、第3章第3節4・5項は川村が執筆した。また、上記職員に加えて、黒須靖之・清水邦彦（茨木市立文化財資料館学芸員）がこれを補助した。
4. 第3章第4節2項に掲載した「千提寺菱ヶ谷遺跡出土の人骨の年代測定」は、平成27年度にパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託したものである。

凡　　例

1. 本書で使用する標高はT.P.（東京湾標準海面）で表記する。各挿図に掲載する表記の内、M.N.は磁北を示し、表記のないものは国土座標系（第VI系）に基づく座標北を示す。
2. 挿図及び本文中の土色表記は、小山正忠、竹原秀雄 編著『新版標準土色帖』（2014年版）に基づく。
3. 遺物、図面・写真等の記録は茨木市立文化財資料館〔〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433〕にて保管している。広く活用されることを希望する。

本文目次

序 文		第 1 節 茨木遺跡	5
例 言		第 2 節 東奈良遺跡	9
凡 例		第 3 節 郡遺跡	13
第 1 章 地理・歴史的環境	1	第 4 節 倍賀遺跡	21
第 1 節 地理的環境	1	第 5 節 溝昨遺跡	25
第 2 節 歴史的環境	1	第 6 節 千提寺菱ヶ谷遺跡	27
第 2 章 平成28年度発掘調査一覧	3	写 真 図 版	
第 3 章 調査の成果	5	抄 錄 ・ 奥 付	

挿図・表目次

図 1 茨木市周辺地形図	1	図 23 KOR16-3 平・断面図	18
図 2 平成28年度発掘調査位置図	4	図 24 KOR16-4 平・断面図	19
図 3 調査位置図	5	図 25 KOR16-3 出土遺物実測図	19
図 4 調査区配置図	5	図 26 KOR16-4 出土遺物実測図	19
図 5 IBK16-3 平・断面図	6	図 27 HKA16-4・5・6 調査区位置図	21
図 6 IBK16-8 平・断面図	7	図 28 HKA16-4・5・6 調査地周辺図	21
図 7 SP4 平・断面図	7	図 29 HKA16-4 平・断面図及び各道構断面図	22
図 8 出土遺物実測図 (IBK16-3・16-8)	7	図 30 HKA16-5 平・断面図及び各道構断面図	23
図 9 調査区配置図	8	図 31 HKA16-6 平・断面図及び各道構断面図	23
図 10 IBK16-7 平・断面図	8	図 32 出土遺物実測図 (HKA16-4・5・6)	24
図 11 出土遺物実測図 (IBK16-7)	8	図 33 調査区配置図	25
図 12 調査区配置図	9	図 34 調査地周辺図	25
図 13 調査地周辺図	9	図 35 平・断面図	26
図 14 平・断面図	10	図 36 トレチ配置図・構構配置図	27
図 15 出土遺物実測図	11	図 37 1トレチ平・断面図	28
図 16 KOR15-7・8 調査区配置図	13	図 38 2トレチ平・断面及びSK9断面図	29
図 17 KOR15-7・8、16-3・4 調査地周辺図	13	図 39 3トレチ平・断面図	30
図 18 KOR15-7 平・断面図	14	図 40 錢貨拓影	31
図 19 KOR15-8 平・断面図	15	図 41 1トレチSK5 平・断面及びSK6断面図	31
図 20 KOR15-7 出土遺物実測図	16	図 42 2トレチSK7 平・断面図	32
図 21 KOR15-8 出土遺物実測図	16	図 43 歷年較正結果	34
図 22 KOR16-3・4 調査区位置図	17	表 1 放射性炭素年代測定結果	34

写真図版目次

図版 1 茨木遺跡		図版 8 郡遺跡	
図版 2 茨木道路		図版 9 郡遺跡	
図版 3 東奈良遺跡		図版 10 倍賀遺跡	
図版 4 東奈良道路		図版 11 倍賀遺跡	
図版 5 郡道路		図版 12 倍賀遺跡	
図版 6 郡道路		図版 13 溝昨道路	
図版 7 郡道路		図版 14 千提寺菱ヶ谷遺跡	

第1章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町、南は摂津市、北は京都府亀岡市に接しており、南北17.05km、東西10.07kmと、南北にやや長い市域を有している。

茨木市域の地理的特徴は、北半部と南半西部、南半東部の三地域に大きく分けられる。北半部は、標高300m前後の北摂山地及び、それから派生する丘陵が占める。南半西部は、標高50～100m前後で洪積層からなる千里丘陵の裾が広がり、南半東部は、市域東部を南北に縦断する安威川、北摂山地より市域中心部に流れる茨木川などの河川によって形成された沖積層からなる平野が広がり、大阪平野の一部を構成する（図1）。

第2節 歴史的環境

茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡など、平野部に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡などで

表面採集や後世の包含層内で検出された、旧石器時代後期のナイフ形石器や有尖頭器に認められる。

縄文時代後期から晩期になると、耳原遺跡において晩期の深鉢棺墓群が検出され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。牟礼遺跡では、縄文晩期から弥生前期の土器や水田跡、井堰等が検出されるなど、茨木市域に人々が根付いている様子が見られだす。

弥生時代前期には、東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝堀遺跡、新庄遺跡に集落跡が見られる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成され、中期から後期にかけては遺跡数がさらに増加し、信賀遺跡、中条小学校遺跡など、河川の両岸や北部の丘陵、山地まで分布的広がりをみせる。特に前期から継続する東奈良遺跡は、幾重もの環濠をめぐらせており、国の重要文化財に指定されている石製鋤鍔型などが出土していることから、青銅器などの鋳造工房を持つ拠点的集落であると考えられている。

古墳時代になると、前期に北部の丘陵に佐保川を挟んで紫金山古墳、將軍山古墳という全長100m前後の前方後円墳が相次いで築造され、中期には、「継体天皇三鷦鷯野陵」に治定されている前方後円墳、太田茶臼山古墳が全長226mの規模で築造される。

古墳時代後期には、南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳などが築造される。耳原古墳は大

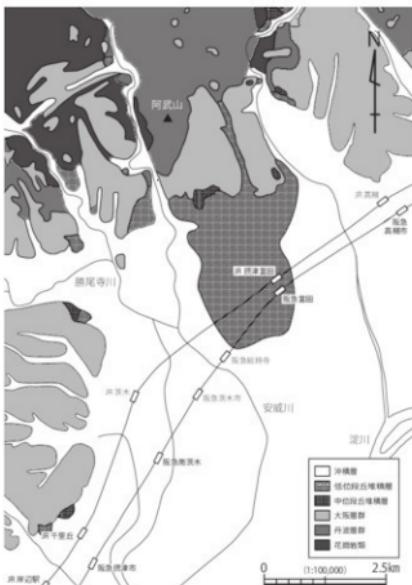


図1 茨木市周辺地形図（市原実編「大阪層群」より作成）

型の横穴式石室を持ち、玄室奥には蓋に計6個の縄掛突起を持つ組合式家形石棺、羨道近くには蓋に計2個の円形突起を作り出す例貫式家形石棺といった型式の異なる2基が安置されている。また、新屋古墳群、安威古墳群、将軍山古墳群、長ヶ淵古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が山裾部を中心に築造される。さらに、低位段丘から平野部においては、時期が前後する中期から後期にかけて太田古墳群、総持寺古墳群、中条小学校遺跡、郡古墳群（丘陵上の単独墳を除く）などのように、横穴式石室を持たない直葬の古墳群が見られる。

古墳時代の集落遺跡としては、東奈良遺跡・中条小学校遺跡・上中条遺跡・茨木遺跡・春日遺跡・倍賀遺跡・郡遺跡・安威遺跡など、数多く挙げられる。近年、安威遺跡や安威城跡で確認された古墳時代中期から後期の集落からは、朝鮮半島南部からもたらされた特徴を持つ遺構・遺物が多く確認され、朝鮮半島南部から渡來した人々と密接な関係があったことが指摘されている。

奈良時代になると、茨木市域は摂津國島下郡に編成される。平城遷都にともない、島下郡には「頃村駅」が置かれ、茨木市域は宮都から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。この通路は、近世の西国街道や現代の高速道路などにもつながり、茨木市の交通の要衝たる特徴は、古代以来脈々と受け継がれている。

また、舍利容器が遺存する太田庵寺や、藤原山蔭創建の総持寺、山林寺院である忍頂寺など多くの寺院が存在したことが知られる。さらに、『延喜式』には、島下郡に13社もの神社が見られ、これは『弘仁式』にまでさかのぼると考えられている。このように、多くの寺社が市内全域にわたって見られ、古代以来、信仰という側面も茨木市の歴史を考える上で非常に重要な視点である。

中世の遺跡としては、東奈良遺跡・新庄遺跡・玉櫛遺跡・草分神社東方遺跡などの集落遺跡が挙げられる。さらに、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、泉原城、佐保砦などの城郭がある。現在の茨木市中心部には茨木城が築かれた。その城主は、茨木氏、中川氏、片桐氏と変遷し、その内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも発掘調査によって得られる知見は、その解明に向けてとりわけ重要である。

また、市域北部の千提寺や下音羽には、東家の「あけずの樋」より発見された「聖フランシスコ・ザビエル像」（神戸市立博物館蔵）をはじめ、キリストian墓碑やメダイなど多くのキリストian遺物が伝世している。これらの遺物は、キリストianの文化が16世紀後半から17世紀前半にかけて禁教令下の江戸時代を通じて秘かに受け継がれてきたことを示し、多くの注目を浴びている。本書所収の千提寺菱ヶ谷遺跡をはじめ、今後発掘調査によって得られる資料は、伝世資料を補間するだけでなく、その土地に根付いた文化や歴史の細部にまで光を照らす重要な鍵となるであろう。

参考文献

- 市原実編 1993『大阪層群』
- 茨木市教育委員会 1998『茨木の史跡』
- 大阪府教育委員会 2000『安威遺跡』
- 茨木市教育委員会 2000『千提寺・下音羽のキリストian遺跡』
- 中村博司編 2007『よみがえる茨木城』
- 茨木市 2012『新修 茨木市史 第一巻 通史I』

第2章 平成28年度調査地一覧

※a～fは、平成28年1月～3月期（平成27年度）に実施したものである。

No.	遺跡名【略号】	調査地	調査期間	面積	担当者	内容
a	郡遺跡【KOR15-4】	郡三丁目	2016/1/6	7.5m ²	富田	溝1条、ビット8基を検出
b	春日遺跡【KSG15-4-】	春日三丁目	2016/1/25	6m ²	富田	土師器、瓦器をわずかに検出
c	牟礼遺跡【MUR15-11】	園田町	2016/2/8・9	8m ²	高村	土師器、須恵器をわずかに検出
d	中条小学校遺跡【CJS15-14】	下中条町	2016/2/15・16	13.5m ²	高村	ビット1基、溝1条を検出
e	郡遺跡【KOR15-7】	郡五丁目	2016/3/7・8	8m ²	富田	本書所収
f	郡遺跡【KOR15-8】	郡五丁目	2016/3/7～10	9m ²	高村	本書所収
1	太田城跡【ODJ16-1】	太田一丁目	2016/4/25・26	4.4m ²	水久保 黒田	土師器、須恵器を検出
2	茨木遺跡【IBK16-3】	片柳町	2016/5/24	6m ²	正岡	本書所収
3	溝昨遺跡【MZK16-1】	五十鈴町	2016/6/8	5m ²	黒田 富田	土師器、須恵器を検出
4	東奈良遺跡【HN16-2】	新中条町	2016/6/15	6m ²	水久保	落ち込みを検出、土師器・須恵器が出土
5	目垣遺跡【MGK16-1】	目垣一丁目	2016/6/20	8m ²	正岡	遺構・遺物なし
6	包藏地外試掘	中穂積二丁目	2016/7/4	16m ²	正岡	遺構・遺物なし
7	中条小学校遺跡【CJS16-2】	西中条町	2016/7/20	9m ²	富田	落ち込みを検出
8	茨木遺跡【IBK16-5】	片柳町	2016/7/29	9m ²	富田	遺構・遺物なし
9	玉櫛遺跡【TMK16-1】	水尾三丁目	2016/8/1	6.25m ²	富田	遺構・遺物なし
10	總持寺遺跡【SOJ16-1】	總持寺駅前町	2016/8/3	7.5m ²	富田	ビット1基を検出
11	茨木遺跡【IBK16-7】	大手町	2016/8/8	9m ²	富田	本書所収
12	中条小学校遺跡【CJS16-3】	下中条町	2016/8/10	9m ²	高村	土坑1基、ビット2基を検出
13	茨木遺跡【IBK16-8】	片柳町	2016/8/17	9m ²	富田	本書所収
14	總持寺遺跡【SOJ16-3】	總持寺一丁目	2016/8/22	6m ²	高村	土坑1基を検出
15	牟礼遺跡【MUR16-2】	園田町	2016/9/9	4m ²	高村	遺構・遺物なし
16	玉櫛遺跡【TMK16-2】	水尾三丁目	2016/9/15	6m ²	黒田	遺構・遺物なし
17	溝昨遺跡【MZK16-2】	五十鈴町	2016/9/21	6.25m ²	木村	本書所収
18	倍賀遺跡【HKA16-4】	春日五丁目	2016/9/27・28	7.5m ²	木村	本書所収
19	倍賀遺跡【HKA16-5】	春日五丁目	2016/9/27・28	7.5m ²	木村	本書所収
20	倍賀遺跡【HKA16-6】	春日五丁目	2016/9/27・28	6.25m ²	木村	本書所収
21	茨木遺跡【IBK16-9】	上泉町	2016/10/6	6m ²	木村	遺構・遺物なし
22	茨木遺跡【IBK16-10】	上泉町	2016/10/6	6m ²	木村	遺構・遺物なし
23	郡山遺跡【KRY16-1】	郡五丁目	2016/10/12	6m ²	木村	
24	郡山遺跡【KRY16-2】	郡五丁目	2016/10/13	6.9m ²	黒田	KRY16-1～3は同一自然流路内
25	郡山遺跡【KRY16-3】	郡五丁目	2016/10/14	6m ²	木村	
26	茨木遺跡【IBK16-11】	新庄町	2016/10/18	6m ²	木村	遺構・遺物なし
27	玉櫛遺跡【TMK16-3】	玉櫛二丁目	2016/10/20	4m ²	黒田	遺構・遺物なし
28	東奈良遺跡【HN16-8】	東奈良一丁目	2016/10/24	5m ²	黒田	弥生土器をわずかに検出
29	東奈良遺跡【HN16-9】	奈良町	2016/10/25・26	18m ²	藤田・高村 富田・黒田	本書所収
30	駄川遺跡【AYK16-2】	駄川二丁目	2016/10/31	4m ²	黒田	土坑1基を検出
31	東奈良遺跡【HN16-10】	東奈良二丁目	2016/11/10	3m ²	黒田	弥生土器、土師器をわずかに検出
32	郡遺跡【KOR16-3】	郡四丁目	2016/11/29	6.25m ²	黒田	本書所収
33	郡遺跡【KOR16-4】	郡四丁目	2016/11/30	6.25m ²	黒田	本書所収
34	溝昨遺跡【MZK16-3】	五十鈴町	2016/12/15	5m ²	木村	GL-1.25mで厚さ0.1mの遺物包 含層を検出
35	茨木遺跡【IBK16-12】	大手町	2016/12/20	5m ²	黒田	土坑1基を検出。瓦・土製品を 検出。
36	千提寺菱ヶ谷遺跡 【SDH16-1】	大字千提寺	2016/5/30～9/2	50m ²	坂田	本書所収

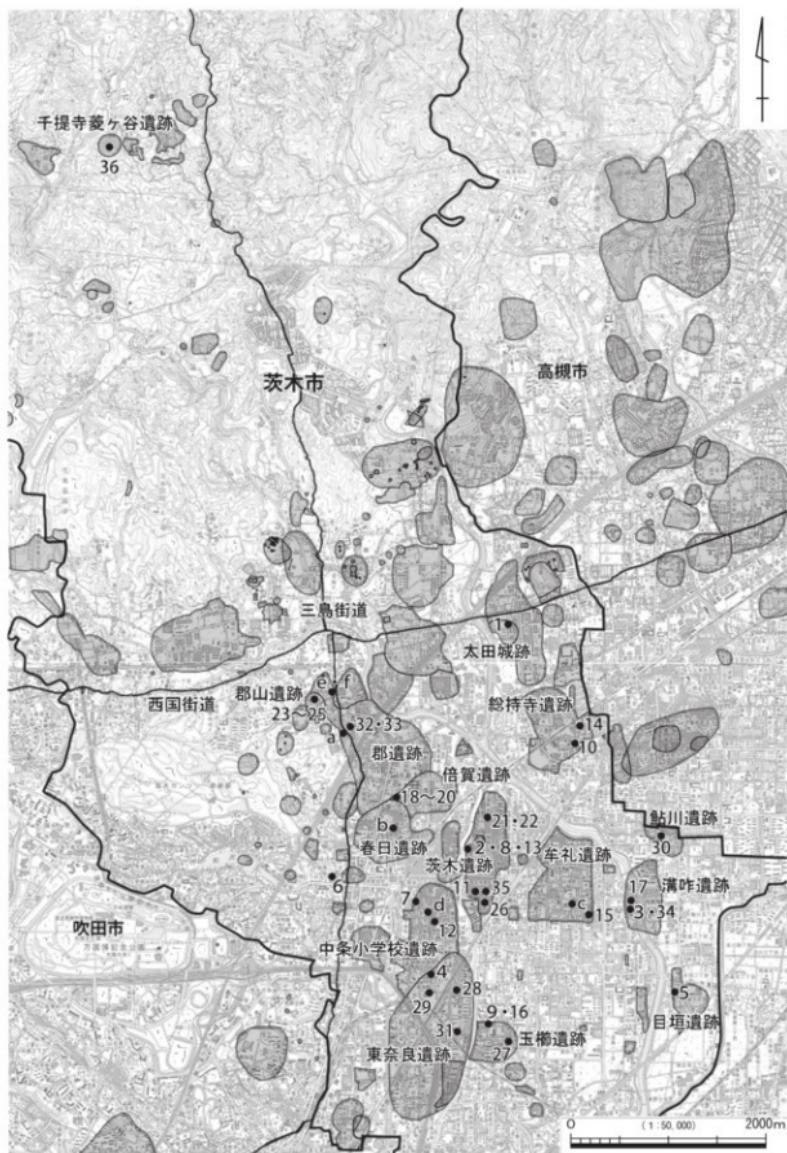


図2 平成28年度発掘調査地位置図 (アルファベット・アラビア数字は前頁No.と対応する)

第3章 調査の成果

第1節 茨木遺跡 (IBK16-3・7・8)

調査地 片桐町・大手町

調査期間 平成28年5月24日～8月17日

調査面積 6 m² (16-3)・18m² (16-7・16-8)

調査担当 富田卓見 正岡大実

1. 調査の概要 (図3・4)

はじめに 片桐町及び大手町において計画された個人住宅建設に伴い、上記期間で3地点の調査地で確認調査を行ったところ、それぞれ遺構・遺物を確認したため、6 m² (IBK16-3)、18m² (各9m²) (IBK16-7・8) の調査区を設定し、本発掘調査を実施した。なお、このうちIBK16-3・16-8調査の2調査区は同じ宅地造成地内に位置しており、16-7調査区はやや離れて位置している。ここではまず北半部に位置する16-3・16-8調査区について述べ、16-7調査区については後述することとする。

2. 各調査区の成果 (図4～10・図版1・2)

〔IBK16-3・16-8基本層〕 16-3調査では擾乱が少なく、地層の遺存状況が良好であった。したがって、ここでは16-3調査で得られた堆積の状況を主として記載する。なお、現地表面の標高はT.P.+11.2mを測り、いずれの調査区もほぼ平坦である。今次調査の基本層序は、下記の4層に大別できる。

0層：盛土 (0-1a層) 及び現代耕作土層 (0-2a層) である。

1層：耕作土層 (1-1a層) である。本層は明るい色調を呈し、やや淘汰が悪く孔隙が多く、層厚は約15cmを測る。確証を欠くが層相より中～近世の耕作土層の可能性が高いとみられる。

2層：耕作土層 (2-1a層) である。グラウル化の影響を受け、1層と比較するとやや暗色味が強く、淘汰が良い層準である。層厚は約20cmを測る。1層と同様、層中から遺物が出土していないため、形成時期については確証を欠くが、層相から中世以後の耕作土層の可能性が高い。

3層：いわゆる遺物包含層 (3-1a層) である。本層は層厚2～3cm程度と遺存状況は全体的に不良であり、ほぼ2層による削剥を受けているものと考えられる。本層の下面において遺構・遺物を確認した。全体的に淘汰が悪く、暗色味の強い色調を呈する砂質シルトで構成されている。16-3調査区ではわずかに遺存しているが、16-7調査区では2層による削剥を受け、ほとんど認められなかった。

4層：しまりが良く、淘汰の良い粘質シルトから構成される水成堆積物 (4-1b層) である。



図3 調査地位置図

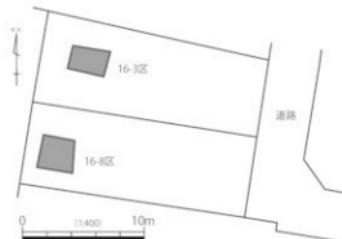


図4 調査区配置図

遺構は3層下面で検出した。なお、4-1b層以下の層準については調査上の限界もあり、さらなる下位層準の確認は成し得なかったが、16-3調査区のSD1より弥生時代後期の遺物片が出土していることや4-1b層自体が極めて良く固結した淘汰の良い層相を示すことなどの諸点より、人為の痕跡が認められる最終面の可能性が高いと考えられる。

[IBK16-3] 3層下面で溝1条（SD1）、ピット5基（SP1～5）を確認した（図5）。

SD1は調査区東端で検出し、北西一南東方向に直線的に調査区外へと延びる。本溝は検出面からの深さ約0.45mを測り、断面V字形の鋭角な掘方を示すことから、人為的に掘削された溝であることは明らかである。埋土は上・中・下層の3層に区分でき、中層より5世紀中葉の須恵器・弥生時代後期の土器片が出土した。出土遺物から、本溝は古墳時代中期に帰属する遺構とみることができる。

小穴は調査区中央付近でまとまって検出している。いずれも検出面から深さ0.25m程度のものが多く、柱痕などは認められず、埋土はいずれもベースとなる4層起源の偽縄を多く含んでいる。遺物が認められなかつたため、詳細な帰属時期は不明であるが、埋土の層相がSD1と近似していることから、古墳時代中期に帰属する遺構の可能性が高い。

1～3はSD-1から出土した遺物である（図8）。1は須恵器無蓋高環の杯部片である。TK208型式前後に該当するものとみられ、5世紀中葉の所産である。2・3は弥生土器の腹底部片である。底部下端がやや突出することから、弥生時代後期の所産とみられる。掲げたもの以外に遺物は認められず、本調査区の基本層序や検出遺構についてのさらなる詳細な手がかりは得られなかった。

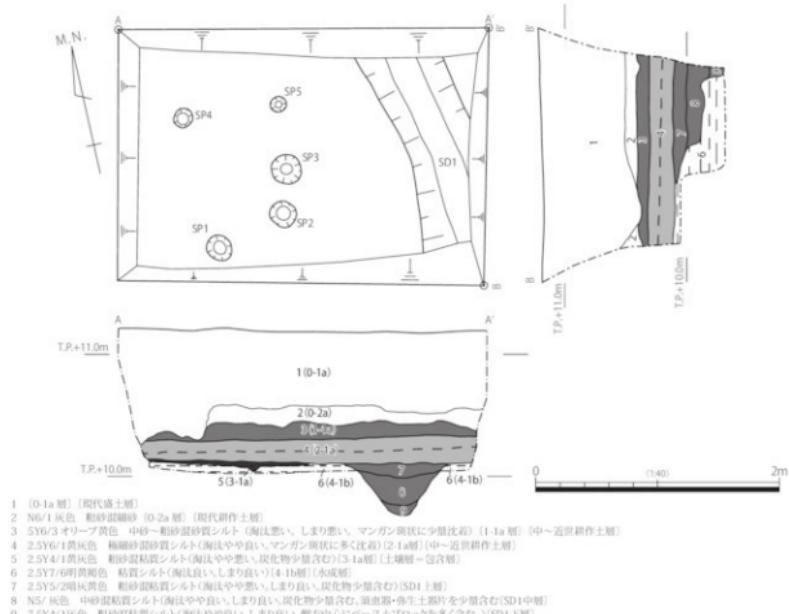


図5 IBK16-3 平・断面図

〔IBK16-8〕 2・3層下面でピット5基 (SP1～5) 溝3条 (SD1～3) を確認した (図6・7)。

ピットはいずれも検出面から20cm程度の深さのものが多く、埋土の層相も16-3調査区の検出遺構と近似する。SP4の底付近からは、根石の可能性がある拳大の礫と土師器片が出土した。これらのピットは、建物を構成する柱穴の可能性があるが、調査面積が狭小であるため詳細は不明とせざるを得ない。

溝は合計3条を検出したが、16-3調査区で検出したSD1とは異なり、いずれも不定な平面形を呈し、掘方も深さ5～12cm程度と浅い。詳細は不明ながら耕作に伴う溝の可能性がある。

遺物は、SP4から土師器片、遺物包含層から土師器・瓦器片が出土した。しかし、その多くは磨滅が著しく、図化し得なかった。4は2層中から出土した和泉型瓦器の底部で、底径5.0cm・残存高0.8cmを測る (図8)。II期に該当するものとみられ、12世紀前葉の所産である。

〔IBK16-7〕 現地表面の標高は、概ねTP+9.7mを測る。調査の結果、得られた層序は4層に大別でき、1層が現代の盛上、2層が近現代の整地土、3層が近世～近代の整地土、4層が水成層である。4層は淘汰の悪い粗粒の堆積物からなる上半と、淘汰の良い中～粗砂で構成される下半の2層に細分できる。

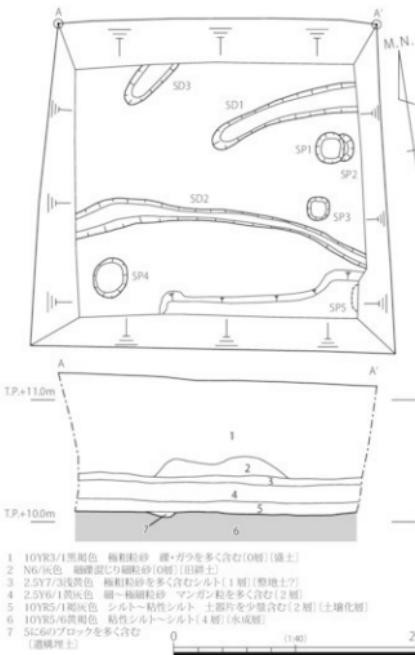


図6 IBK16-8 平・断面図

いずれも葉理は不明瞭であるが、氾濫堆積物とみられる。遺構の検出は3層下面にて実施した。

当調査区では、ピット5基 (SP1～5)、溝2条 (SD1・2) を確認した。

ピットは検出面からの深さで概ね2層に区分することができ、SP1～3は20cm以内と浅く、SP4・5は30～40cm程度と深い。溝は2条検出したが、そのうちのSD2は東西方向に直線的に延びており、幅80cm以上、検出面からの深さは約50cmと広

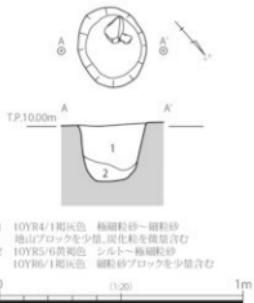


図7 SP4 平・断面図



図8 出土遺物実測図 (IBK16-3・16-8)

く深い。これに加え、掘方もしっかりした台形を呈していることから、本溝は何らかの基幹的な水路などの性格を有していた可能性もある。周辺での調査成果の追加をまって慎重に判断したい。

遺物は SD2 より出土した。5 は土師器小皿である（図 11）。復元径 10.2cm・残存高 1.4cm を測り、口縁部はやや段を持ち、鈍く外反する。細片のため詳細な時期比定は困難であるが、14 世紀に帰属する可能性が高い。

3.まとめ

今回の調査では、茨木遺跡内の北半部（IBK16-3・16-8）と南半部（IBK16-7）において各種の遺構・遺物を確認した。茨木遺跡内では比較的小規模な調査が多く、断片的な情報が中心となっているため、様相が今一つ明瞭ではない。

しかしながら、今回の調査によって、北半部では主に古墳時代中期・中世の溝・ピットを検出し、当該時期の営為が元茨木川周辺まで及んでいたことが明らかとなったほか、各時代の微地形の復元について重要な知見を加えることができた。また、南半部については遺構埋土からの遺物が少ないため、時期比定には困難を作りうる、概ね 14 世紀以後の遺構が確認できた。今後の周辺域の調査事例の追加によってさらに様相が明らかになると期待できる。

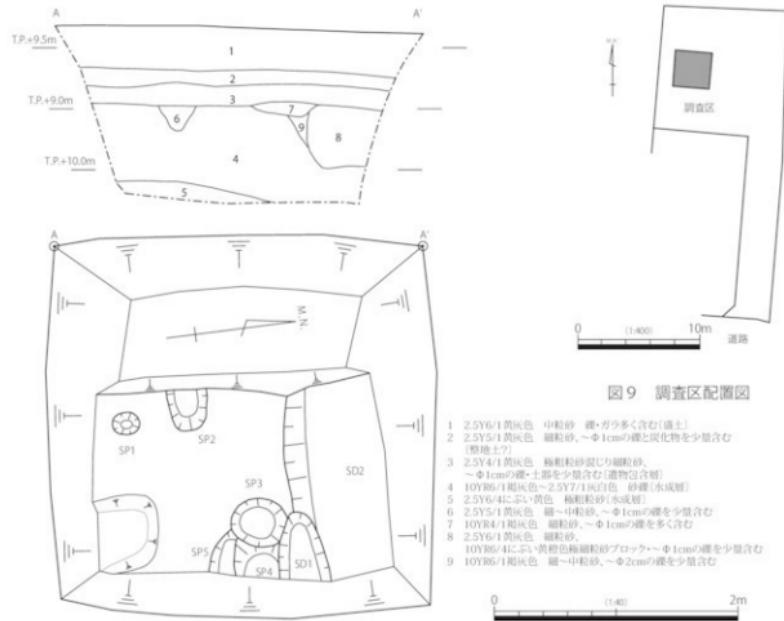


図9 調査区配置図

図10 IBK16-7 平・断面図



図11 出土遺物実測図 (IBK16-7)

第2節 東奈良遺跡 (HN16-9)

調査地 奈良町460番8

調査期間 平成28年10月25日・26日

調査面積 合計18m²

調査担当 藤田徹也 富田卓見 黒田昂嗣

1. 調査の概要 (図12・13)

はじめに 茨木市奈良町において計画された個人住宅建設に伴い、建物建築予定範囲内に 18m²の調査区を設定し、上記の期間で発掘調査をおこなった。

申請地は東奈良遺跡内の北西部に位置しており、周辺ではこれまでの発掘調査で弥生時代から中世にかけての遺構、遺物を多く確認している。特に今次調査地が位置する東奈良遺跡北部では、弥生時代・古墳時代後期の埋蔵文化財が多く確認されており、弥生時代前～後期の集落を囲む数条の濠や完形の石製銅鐸鋸型が出土したことなどで知られる。

基本層序 調査地の現況は耕作地である。現地表面 (GL) の標高は T.P.+8.15 m 前後で、調査地南側の道路面からは約 0.6 m 低い。得られた層序は 1 層 現代耕作土、2 層 床土、3 層 地山の堆積順である。周辺での既往の調査では、地山層を被覆する弥生時代～古代の遺物包含層が確認されているが、今次調査では認められず、後世に削平を受けたと考える。遺構検出は、地山層上面 (GL - 約 0.2 m) にて実施し、次項に挙げる成果を得た。

2. 調査区の成果 (図14・図版3)

建物跡を構成すると考えるピット 13 基 (SP1 ~ 13)、溝 4 条 (SD1 ~ 4) を検出した。以下、遺構名は遺構略号で呼称する。

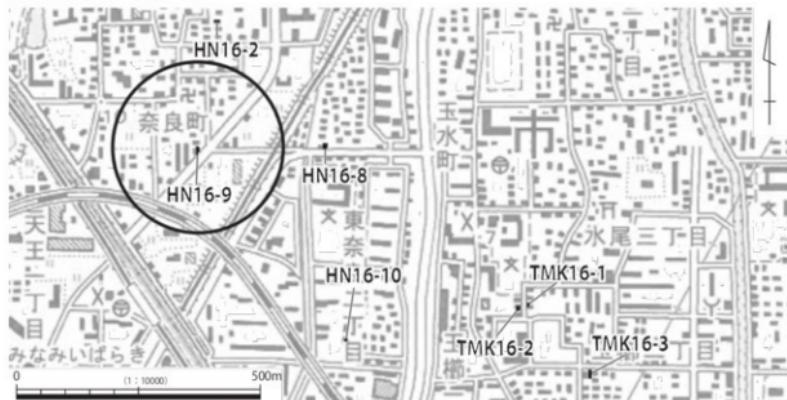


図13 調査地周辺図

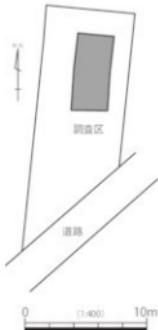


図12 調査区配置図

13基のピットは径0.19～0.45m、深さ0.03～0.23mを測る。これらは径の大きさ0.3mを境として大別できそうである。径0.3mまでのものはSP1・2・5・7・9・12・13の7基、径0.3mを越えるものはSP3・4・6・8・10・11の6基である。平面形はほとんどが円形を呈するが、隅丸方形を呈するものが3基あり、この3基については径が0.4m以上と大きい。また、埋土はいずれも細砂～極細粒砂を主体とするが、色調において差異が認められる。黒褐色～暗灰色系と黄灰色系の2種である。前者にはSP1・2・7・9が、後者にはSP3・4・5・6・8・10・11がある。つまり、黒褐色～暗灰色系の埋土のものは径が0.3mまでのもので平面形が円形を呈するもの、黄灰色系は径0.3m以上のものが多くを占め、平面形が隅丸方形を呈するものが3基含まれる。ここで重複関係にあるSP7とSP8の土層断面を観察すると、黄灰色系埋土である後者が新しいことが確認できることから、埋土の差が時期差を示していると推測できる。

これらのピットを以上の観察で得られた法量や形状、埋土の共通性から建物跡の復元を検討してみた

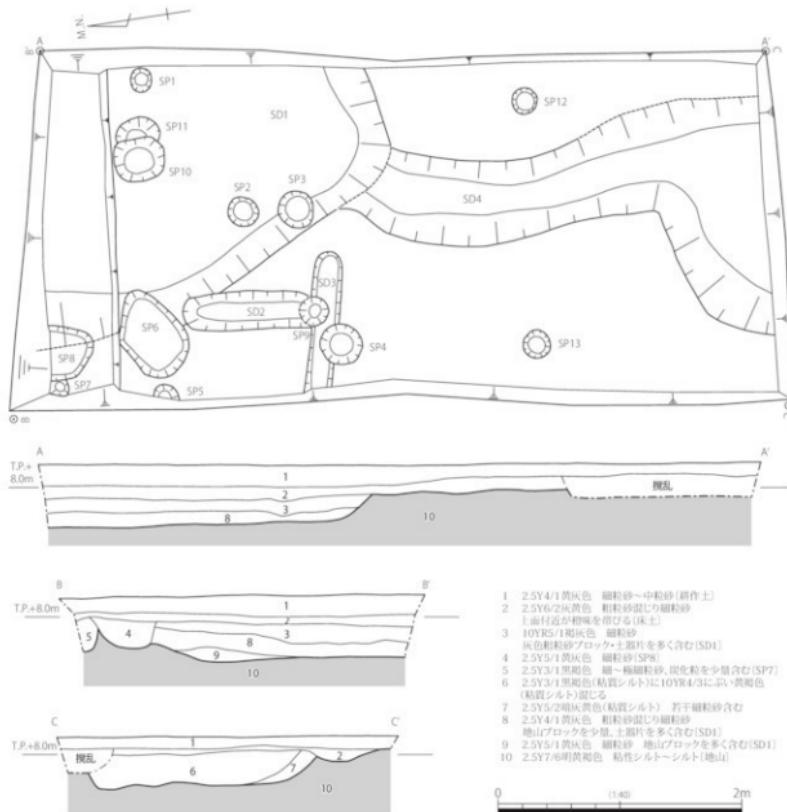


図14 平・断面図

い。まず、径が0.3m以下で、黒褐色～暗灰色系の埋土で共通するのはSP1・2・7・9の4基である。このうちSP1・2・9は軸をもって並ぶものの、芯々距離は1.35mと1.0mと不揃いである。また、径が0.3m以上で、黄灰色系の埋土で共通するSP3・4・6・8・10・11の6基についてはプランを描くことはできなかった。

遺物が出土したのはSP7から土師器が、SP9からは土師器と須恵器の破片のみで、時期を決める手がかりには至らないものである。

SD1は、調査区北壁から南へ向けてのびたあと、角度を変え東壁へとのびており、幅2.05m以上、深さ0.25m、長さ2.3m以上を測る。溝としたが、方形を呈する大型土坑である可能性も考えられる。埋土は上層と下層に大別でき、上層は灰色粗粒砂ブロックを多く含む細粒砂層、下層は明黄褐色の地山ブロックを少量含む細粒砂層である。この両層より、遺物が出土した。上層からは飛鳥時代頃のもの、下層から古墳時代後期頃の土器片が出土している。このことから、SD1は古墳時代後期から飛鳥時代にかけて使用され、廃棄されたと推測される。SD2は、調査区北部にて南北方向にのびており、幅0.32m、深さ0.05m、長さ1.1mを測る。SD3は、調査区中央で東西方向にのびており、幅0.24m、深さ0.1m、長さ1.11m以上を測る。SD4は調査区中央～南部にかけて南北方向にのびており、幅0.65m、深さ0.3m、長さ3.15m以上を測る。埋土より須恵器甕の体部片が出土した。SD1との先後関係は、調査区北・東壁の土層断面にSD4の埋土がみられないことから、SD1が新しい時期、もしくは同時期のものと思われる。

3. 出土遺物（図15・図版14）

遺物は、SD1を中心に土師器・須恵器が出土した。しかし、その多くは磨滅した細片で、図化できたものは少ない。6～12・15・16はSD1上層から、13・14・17は、SD1下層からの出土遺物である。1は土師器皿で、復元口径16.0cm、残存高1.75cmを測る。2は土師器甕で、復元口径26.0cm、残存高3.7cmを測る。「く」の字形に外反し、口縁端部外面に面を作る。ヨコハケ後ナデ調整である。8は管状土錘である。径2.15cm、長さ4.55cm、重さ24gを量る。体部中央がやや膨らんだ円柱状で、中心を径0.6cmの円孔が貫通する。全体が磨滅しており、使用痕の有無は不明である。9～12は須恵器蓋環の环身である。口径は8.8～10.0cm、器高は3.3～3.6cmとまとまりがある。口縁部がわずかに外反気味に伸びるもの（9・10）と直立気味のもの（11・12）がある。底部外面には回転ヘラ切り後、軽くナデを施すもの（12）と未調整のもの（9・11）がある。口縁から体部にかけては回転ナデである。

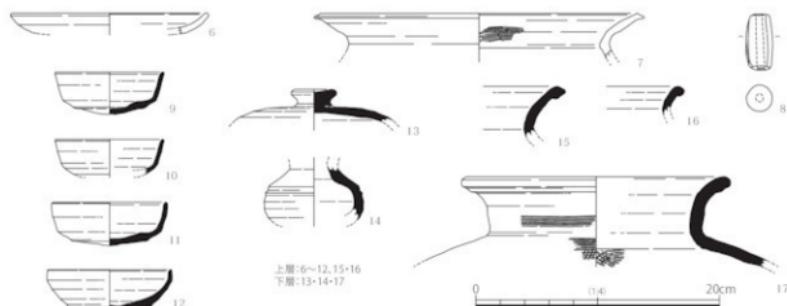


図15 出土遺物実測図

9～12の須恵器环身は、飛鳥II（7世紀中葉）の範疇におさまるものであろう。13は須恵器高杯の蓋で、残存径12.9cm、残存高2.5cmを測る。頂部に径3.6cm、高さ1.45cmの扁平つまみで、中心が凹面をなす。14は須恵器甕の体部片である。復元頸部径4.0cm、残存高4.25cmを測り、肩部に幅0.6cmの沈線1条を施す。15は須恵器甕の口縁部で端部は断面方形に肥厚させる。16は須恵器甕の口縁部で短く外反し、端部は丸く肥厚する。17は須恵器甕である。頸部から直立気味に立ち上がり、口縁端部付近で外反し端部を肥厚させる。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキが施されている。

4.まとめ

古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした遺構・遺物を確認した。ピットについては周辺の既往調査から、黒褐～暗灰色系埋土のものが弥生時代・古墳時代後期～古代墳、黄灰色系埋土のものが中世墳の時期に比定されるとの報告がある。今次調査で検出したピットについては出土遺物からその所属時期を判断することは困難であり、また建物跡の復元も推察し得るには至らなかった。しかしながら、観察で得られた法量や形状、埋土の共通性から、検出したピットの中でも時期差が認められることは、上記の報告を追認できる一つの資料となろう。

今次調査で大きな面積を占めるSD1からは、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物が出土した。SD4から須恵器甕の体部片は出土しているものの、時期を決定できるものではない。しかしながら、近隣の調査にて確認した弥生時代前期～後期の濠を伴う集落と同時期の遺構は、今次調査では認められず、古墳時代後期以降に集落が展開された様子は特筆すべきである。勿論、限られた調査面積や後世の削平などの要因で一概には言えないものの、集落は時代ごとにエリアを変えて発生したことは明白であるし、今次調査の結果はその様相の一端を示しているものと考える。

第3節 郡遺跡（KOR-15-7・15-8・16-3・16-4）

調査地	郡五丁目761番21の一部(15-7・8)	調査面積	合計21.5m ² (15-7・8)
	郡四丁目813番7の一部(16-3・4)		合計12.5m ² (16-3・4)
調査期間	平成28年3月7日～3月10日(15-7・8)	調査担当	富田卓見(15-7) 高村勇士(15-8)
	平成28年11月29・30日(16-3・4)		黒田昂嗣(16-3・4)

1. 調査の概要（図16・17）

はじめに、茨木市郡四丁目と五丁目において計画された個人住宅建設に伴い、建物建築予定範囲内に調査区をそれぞれ設定し、上記の期間で発掘調査をおこなった。調査区配置図が示すとおり、KOR15-7とKOR15-8は約10mの距離がある（図16）。また、この調査区から約430m南西に位置するKOR16-3と16-4についても、同じ遺跡内の北部に所在することから、前述の調査区に統いて当節にて報告する。

今次調査地は郡遺跡内の北部に位置している。周辺の既往の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認しており、比較的密度の濃い複合遺跡として知られる。

2. 15-7・15-8 区の成果（図18～21・図版5～7）

〔KOR15-7・15-8 基本層序〕 基本層序は、以下の6層に大別できる。

1層 盛土層である。層厚約60cmを測る。

2層 現代耕作土層である。いずれも灰色を呈し、両調査区ともに下面を概ね同レベルで揃える。このことから、両調査区で確認した2層は同一層と推定でき、耕作は調査地近辺に広がっていたと考えられる。

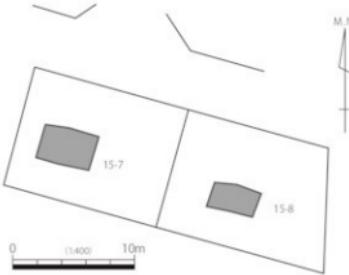


図16 KOR15-7・8 調査区配置図

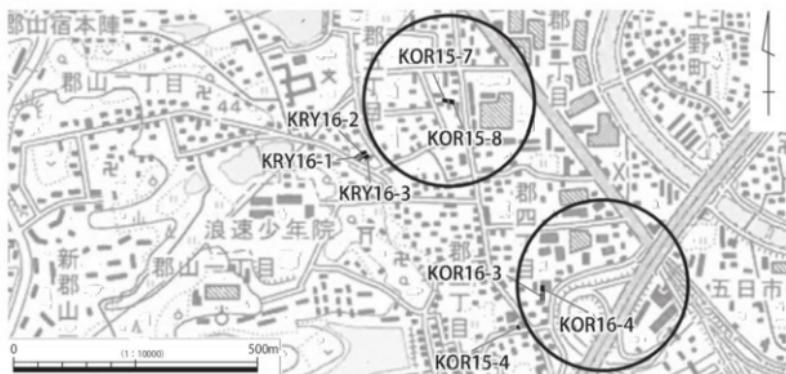


図17 KOR15-7・8、16-3・4 調査地周辺図

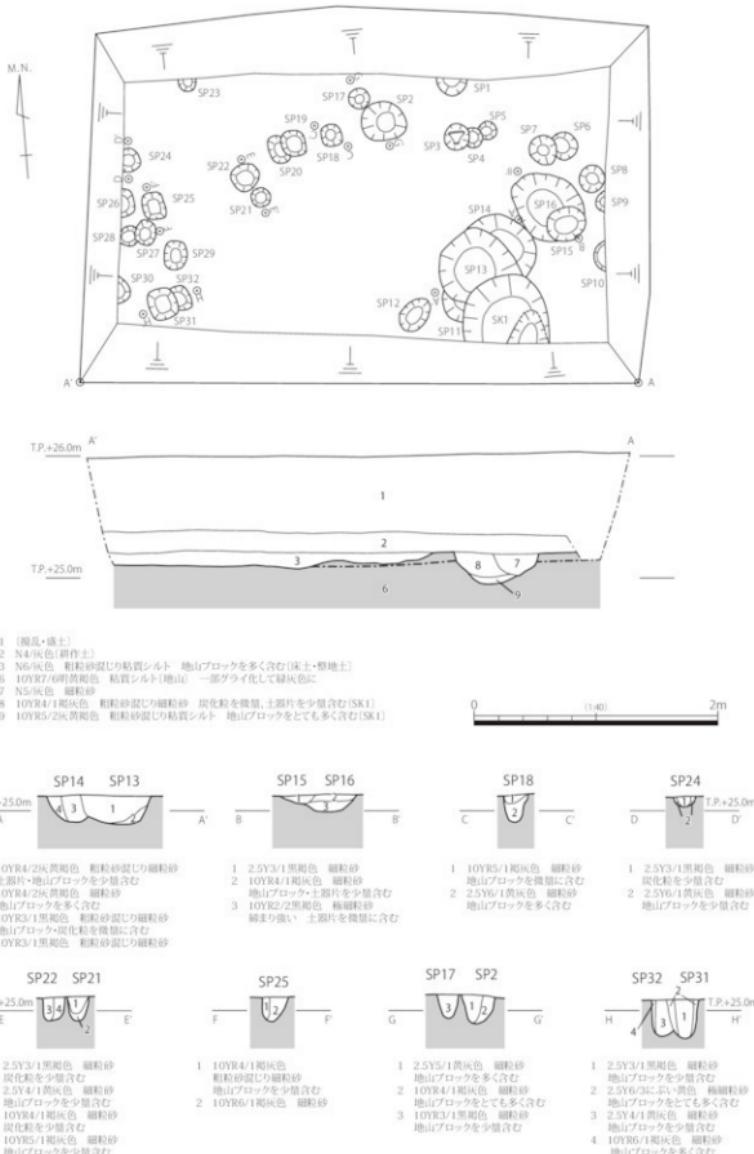


図18 KOR15-7 平・断面図

3層 床土及び整地土層である。15-7においては、6層の起伏に応じて凹面にのみ堆積しており、整地的因素が強いが、15-8では、酸化により黄褐色を呈し、水平に堆積していることから、床土として機能していたと考えられる。いずれも、2層に付随して人為的に敷かれた上層である。

4層 砂質シルトをベースに細砂が不均一に多く混じり、淘汰が悪い。また、マンガン粒を斑状に、磨滅した土師質土器片を微量に含むが、所属時期を特定するには至らない。中世若しくは近世の耕作土層であろうか。なお、15-7においては、当層が認められず、削平を受けたと推測される。

5層 遺物包含層である。土壤化し黒褐色を呈し、土器を含む。出土する土器は、後述するように、弥生時代後期所産の土器から、6世紀末から7世紀初頭の須恵器まで含まれるが、出土する須恵器は少量で、概ね弥生土器を中心である。また、当層も15-7においては確認できず、削平を受けたと推測される。

6層 ベース土層。一部グライ化して緑灰色に変色するが、概ね明黄褐色を呈する、淘汰の良い粘質シルト層である。ただし、当層は、15-8の東端においては径約2cmの礫を含む細砂で構成され、一律ではない。また、15-7においては、4層、5層とともに当層についても、上部を削平されている可能性がある。なお、上面レベルは15-7が15-8より約30cm高い。本次調査区は、巨視的には西の千里丘陵から、東や北を流れる茨木川や勝尾寺川に向かって下降する地形上にあったと想定される。わずか10mの距離で30cmの高低差がみられることは、この想定と符合する。

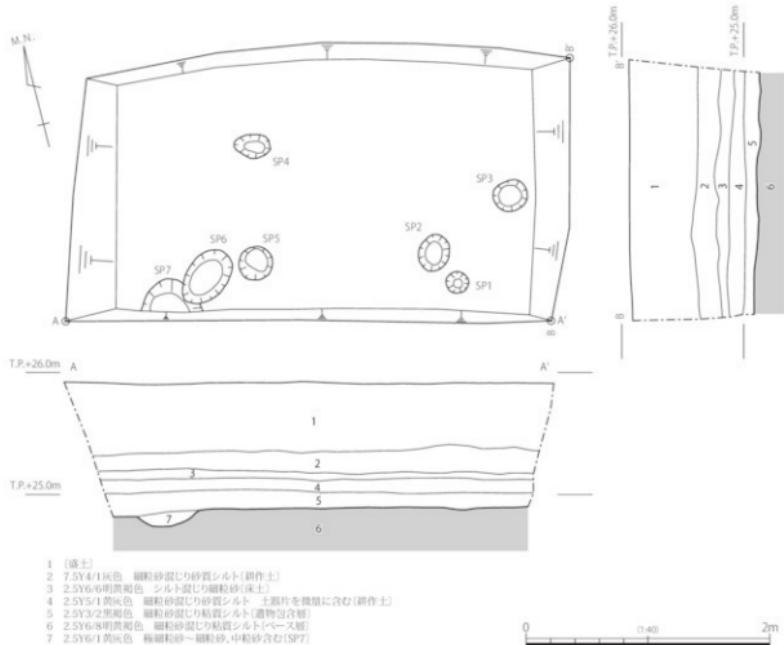


図 19 KOR15-8 平・断面図

〔KOR15-7区遺構〕 ピット32基（SP1～32）、土坑1基（SK1）を検出した。以下、遺構名は遺構略号で呼称する。

ピットの大きさは径0.2～0.4m、深さは0.1～0.4mを測る。中でもSP31・32は柱痕が明瞭に認められ、深さも0.32mと良好に遺存していた。また、SP3からは弥生時代の高環脚部が、底に接した横位の状態で出土した。ピットの径は0.2m、深さは0.25mで、高環脚部を横位に埋置できる最小限の径と言えるだろう。ピットからは脚部以外の破片は認められないことから、意図的に脚部のみを埋置したのであろう。SP3以外で遺物が出土するのはSP17で、弥生土器の甕底部が出土する。しかし、遺物の出土はこの2基のみである。32基のピットの多くは建物を構成する柱穴と考えるが、遺物の出土や調査面積が限られること、またピットの重複もあり、そのプランを推察することは困難であった。

〔KOR15-8区遺構〕 ピット7基（SP1～7）を検出した。ピットは、小さいもので径0.2m前後、大きいもので径0.5cm前後、深さは0.05～0.2mを測り、平面形は円形を呈する。前述のKOR15-7と比べ、遺構の検出密度は低い。これらのピットは、建物を構成する柱穴と考えられるが、今回の狭小な調査範囲ではプランを推察するには至らなかった。

〔KOR15-7区遺物〕 遺構内より弥生土器や土師器を中心とした土器片が出土した。しかし、その多くは磨滅した細片で、図化できたものを述べる。18はSK1内から出土した弥生土器の甕底部で、底径6.0cm・残存高2.3cmを測る。19はSP17内から出土した弥生土器の甕底部で、底径8.2cm・残存高3.0cmを測る。20はSP3内から出土した弥生土器の高環脚部で、底径12.0cm・残存高6.9cmを測る。裾端部はわずかに外反し、裾端部の整形時にナデによって端面部にわずかに凹みをもつ。また、脚柱部には5条の帯状沈線が横方向に施されている。穿孔は施されていない。これらはすべて弥生時代後期の範疇に収まるものであろう。

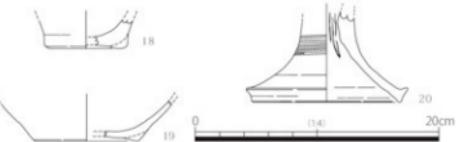


図20 KOR15-7 出土遺物実測図

〔KOR15-8区遺物〕 遺物は、地山層直上の遺物包含層内より弥生土器・須恵器が出土した。21は弥生土器の甕底部である。底径4.0cm・残存高2.1cmを測る。22は弥生土器の甕底部で、底径5.8cm・残存高2.9cmを測る。これらは弥生時代後期のものであろう。23は須恵器環蓋の杯身で、径を復元するには至らなかった。受け部や立ち上がりは短い。時期は、6世紀後葉～7世紀初頭（TK43～TK209型式）頃のものと考える。

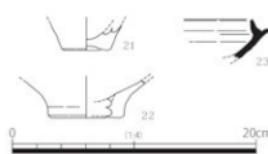


図21 KOR15-8 出土遺物実測図

3. 15-7・15-8区まとめ

両調査区において建物を構成すると考える多くのピットを確認した。特に西側に位置する15-7区においてはピットの多くが重複し、建て替えなどによって異なる時期において存在した結果であろう。しかしながら、ピットからは弥生時代後期所産の甕などが出土するのみであり、プランの推察とともに重複する異なる時期を明確にすることはできなかった。注目すべき点はピットの一つに高環脚部のみが横位の状態で出土したことである（図版6参照）。この状況は、軟弱地盤における沈下防止というような実用に即したものであったのか、もしくは他に何らかの目的があったのかは分からぬ。

また、15-8区では15-7区に比べて遺構が希薄である。層序において述べたように、15-7区では削

平された可能性があるベース土層上面の4層と5層が15-8区では確認されているにも関わらず、遺構が希薄である点は、茨木川や勝尾寺川に向かって下降する地形に制約された結果を考えることもできる。勿論、限られた面積での部分的な見解ではあるものの、15-8区ではピットの重複がみられないことから、指呼の間にありながらも、重層的な遺構面の形成が及ばなかったと言えよう。

4. 16-3・16-4区の成果（図17～26・図版8・9）

〔KOR16-3・16-4基本層序〕 両調査区の基本層序はおむね共通しており、厚さ20～60cmの盛土層の下に、耕作土層10～20cm、整地土層と続き、遺物包含層は20cm前後の厚さを確認した。遺構はベース土層上面（GL-1m）で検出した。ベース土層の標高はT.P.+23.3m前後である。

〔16-3土層・遺構〕 1・2層は盛土層、3層は現代耕作土である。4～6層はいずれも砂質シルトをベースとする整地土層であり層厚30～50cmを測る。9層は遺物包含層、10層がベース土である。

検出遺構は溝2条（SD1、SD2）、ピット4基（SP1～4）である。これらとは別に、西側壁断面の観察によって包含層（9層）上面から切り込む2基の遺構を確認した。一つは断面南側で観察できた径約20cm、深さ10cmを測るピットであり、もう一つはその北側で深さ15cmを測る落込みである。埋土は前者が5BG5/1 青灰色砂質シルト（8層）、後者は7.5YR7/1 明褐灰色中粒砂～極細粒砂（7層）である。しかしこれらの遺構を平面で捉えることはできなかった。これと同様に、地山上面で検出した他の遺構も本来は遺物包含層上面で検出できた可能性がある。

SD1とSD2は平行して東西に走る溝状遺構である。SD1は長さ約84cm、幅約20cmを測り、埋土は10YR3/1 黒褐色細粒砂混じり極細粒砂～砂質シルトである。SD2は現況の長さ64cm、幅35cm、埋土は7.5YR3/1 黒褐色中粒砂混じり極細粒砂～砂質シルトである。深さはともに10cm程度で、埋土も砂質シルトで共通し、溝底は凸凹状を呈する。耕作溝と考えられる。SD2からはTK209～217型式におさまると考える須恵器高环の脚部が出土している。

SP1は径約20cm、深さ10cm、埋土は10YR4/2 灰黄褐色中粒砂混じり極細粒砂～砂質シルトである。土師器片が出土しているが、時期は不明である。SP2は径34cm、深さ約20cm、埋土は2.5Y3/1 暗赤灰色粗粒砂混じり極細粒砂である。SP3とSP4はSD2に切られる。埋土はともに10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂混じり極細粒砂であり、本来は一つの遺構であったのかもしれない。深さはともに約8cm程度である。SP3からは弥生土器の壺が出土しており、第IV様式に比定される。

平面で検出した遺構はいずれも黄褐色の粘質シルトである地山上面で検出し、埋土は砂質シルトを基本とする單一層である。

〔16-4土層・遺構〕 1・2層は盛土、その下から9層上面まで搅乱を受けている。9・10層は整地土層、11層は遺物包含層である。18層は16-3区でもみたように黄褐色を基本とする粘質シルトのベース土層である。

検出遺構は流路1条（SD1）、土坑1基（SK1）、ピット1基（SP1）である。SD1は南北方向の流路で、東肩は調査区外にある。現況で幅1.6mを測る。埋土は5Y5/1 灰色粘質シルト（14層）の堆積

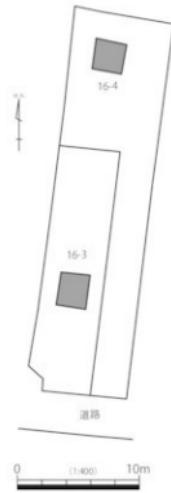


図22 KOR16-3・4 調査区位置図

が 10cm、溝肩部より 2.5Y5/2 暗灰黄色中粒砂～細粒砂（13 層）の後に 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂～細粒砂（12 層）が覆う。深さは約 35cm である。この SD1 はほぼ南北方向に伸びるもの、南側に 16.5m 離れた 16-3 区において同様の遺構は検出されていない。仮に 16-3 区の西側壁断面において観察できた落込みが、当調査区で検出された SD1 の東肩と捉えるなら、この地点で西側に向かって変えたと考えることもできるだろう。いずれにしても SD1 は 16-3 区との間にいて、向きを変えたか、もしくは終息したものであろう。遺物は須恵器蓋環の蓋が出土している。時期は MT85～TK43 型式（6 世紀中～後葉）と考える。

この SD1 に切られる遺構が南側と西側壁断面で観察できる。10YR3/1 黒褐色細粒砂～砂質シルト（15 層）を埋土とするが、平面で捉えることはできなかった。

SK1 は現況で径 1.1m を測る。深さは約 52cm、2.5Y2/1 黒色細粒砂～極細粒砂混じり粘質シルトを埋土とする。

SP1 は西側壁断面で SK1 を切る形で観察できたものの、平面で捉えることは困難であった。深さは 48cm、埋土は N3 暗灰色粘質シルトである。

〔16-3出土遺物〕 24 は SP3 出土の弥生土器の壺である。口縁端部を上下に拡張し、2 条の細い凹線紋を巡らせている。胎土には微量の角閃石を含み、暗褐色を呈する。第IV 様式のものであろう。

25 は SD2 から出土した須恵器高环の脚部である。底径は 12.4cm を測る。脚部は「ハ」の字形に広

- 1 (盛土)
- 2 10YR4/4 黄褐色 細粒砂
- 3 5Y3/1 オリーブ褐色
- 4 小石混じり細粒砂～極細粒砂 [現代耕作土]
- 5 7.5Y4/1 黄褐色 稕～細粒砂～極細粒砂
- 6 2.5G4/1 暗オリーブ色 砂質シルト [整地土]
- 7 2.5GY5/1 オリーブ灰色 砂質シルト～粘質シルト
- 8 7.5YR7/1 明褐色 中粒砂～極細粒砂
- 9 5BG5/1 青灰色 砂質シルト
- 10 10YR5/6 黄褐色 粘質シルト [ベース層]

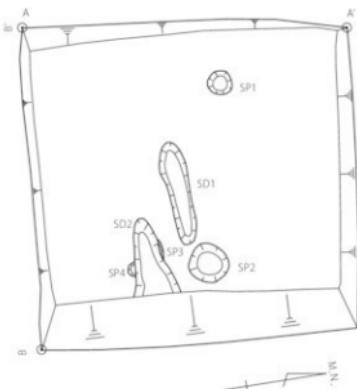
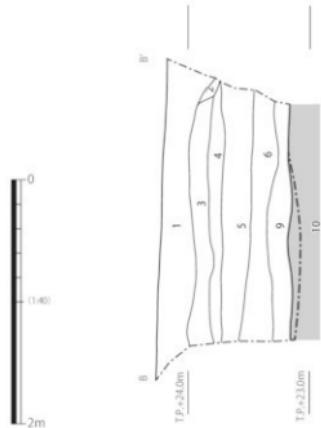
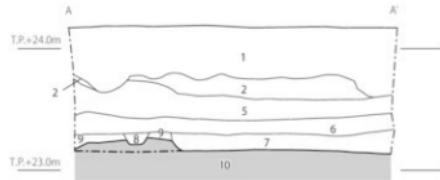


図23 KOR16-3 平・断面図

- [底土]
- 2.5Y4/1灰色 和粘粒～極細粒砂
- 2.5Y4/3オーリーブ褐色 細粒砂～極細粒砂
- 2.5Y4/3オーリーブ褐色 細粒砂～砂質シルト
- 2.5Y5/3黒褐色 中粒砂～極細粒砂
- 10YR4/2灰褐色 中粒砂～細粒砂
- 2.5Y4/3オーリーブ褐色 粗粒砂～極細粒砂 [土壤化層]
- 2.5Y4/4C2灰褐色 粘粒砂～極細粒砂
- 10YR4/3C2灰褐色 粘粒砂～中粒砂 [土壤化層・遺物包含層]
- 2.5Y5/3黒褐色 極細粒砂～細粒砂
- 2.5Y5/2灰褐色 中粒砂～細粒砂 SD1埋土
- 5Y5/1灰褐色 粘質シルト
- 10YR5/1黒褐色 粘質シルト SP1埋土
- 2.5Y2/2黑色 細粒砂～極細粒砂混じり粘質シルト SK1埋土
- 2.5Y6/6明黄色褐色 粘質シルト [ベース層]

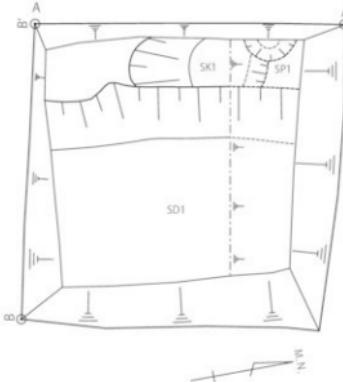
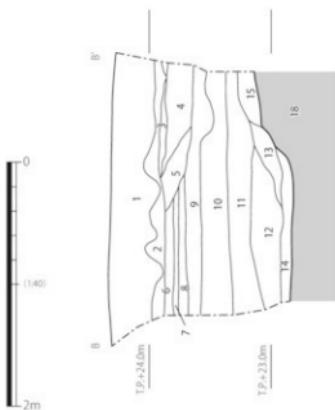
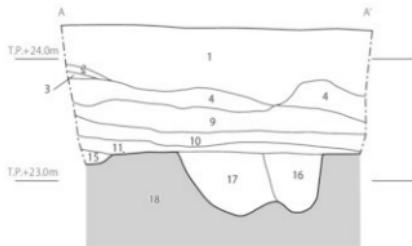


図24 KOR16-4 平・断面図

がり、端部は下方に屈曲する。TK209～217型式におさまるものと考える。

〔16-4出土遺物〕 26はSD1から出土した須恵器蓋環の蓋である。口径は15.2cmと大きく、器高は4.4cmを測る。天井部と口縁部を界する稜は失われ、口縁部は「ハ」の字形に短く外反する。口縁部内面は内傾し、わずかに凹面をなす。天井部は丸みを帯びており、その外面約1/2に回転ヘラケズリを施す。

27は包含層出土の須恵器蓋環の环身である。口径は12.8cm、器高は3.4cmを測り、やや扁平である。たちあがりは内傾し、受部は短い。口縁端部は内傾し、小さな面をなすがシャープなものではない。底部の外面1/2以上を回転ヘラケズリする。1、2ともにMT85～TK43型式（6世紀中～後葉）と考える。

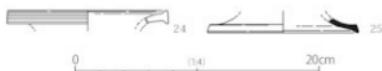


図25 KOR16-3 出土土器実測図

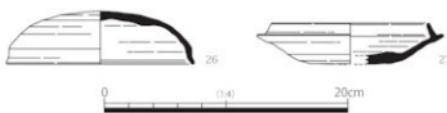


図26 KOR16-4 出土土器実測図

図化し得なかつたが包含層から円筒部と考える埴輪片が出土している。厚さは約1cm、焼成は硬質である。小片ではあるものの外面にB種横ハケが確認でき、弧を描く線刻が認められる。古墳時代中期に属するものである。

5. 16-3・16-4区のまとめ

当調査地は郡遺跡の北部に位置する。郡遺跡は浜津国島下郡の郡衙推定地であり、奈良時代から平安時代の建物跡も確認されているものの、その確実な発見には至っていない。また当調査地東側における調査では、弥生時代中期から後期の方形周溝墓や竪穴住居跡、古墳時代中期～後期の埋没古墳といった成果が報告されており、郡衙跡という一面だけでは語れない多様な様相を示している。

今回の調査地はそれぞれが狭小であるため、2調査区分の成果をあわせ考えてみたい。16-3区からは飛鳥時代の遺物を包含する耕作溝と考えられる遺構を検出した。16-4区からは古墳時代終末期の遺物を包含する南北方向に走る流路を検出した。また包含層からは弥生時代中期の壺片や古墳時代中期の埴輪片も確認された。埴輪片の出土は、近隣において古墳時代中期に属する埋没古墳の存在を示唆するものである。郡衙跡を直接的に指し示す資料の出土はなかったものの、弥生時代から歴史時代まで続く郡遺跡の多様な側面を知ることができた。こういった郡遺跡の重層的な歴史を語るには、調査で得られた成果を時代ごとの平面的な広がりの中で捉えなおす作業も必要になろう。

〔参考文献〕

茨木市教育委員会 2005年『郡遺跡発掘調査概要報告』- 茨木市生涯学習センター建設事業に伴う発掘調査概要報告 -

第4節 倍賀遺跡 (HKA-16-4 ~ 16-6)

調査地 春日五丁目43番4・7・8

調査期間 平成28年9月27日・28日

調査面積 合計21.25m²

調査担当 木村健明

1. 調査の概要 (図27・28)

はじめに 春日五丁目において計画された個人住宅3軒の建築に伴い、上記の期間で各申請地に調査区を一箇所ずつ設定し、本発掘調査を行った。調査地点は北西側が郡遺跡、南側が春日遺跡に挟まれた地点に位置する。周辺は個人住宅建築に伴う小規模な調査が数件行われている程度で、様相の不明な点の多い地区である。

基本層序 現地表面の標高はいずれも T.P. + 16.5 m を測る。層序は上から 1 層（盛土・層厚 0.3 ~ 0.5 m）、2 層（旧耕作土・層厚 0.1 ~ 0.2 m）、3 層（耕作土・層厚 0.1 m）、4 層（地山）である。

HKA16-6 調査区では、盛土層が 0.45m と厚かったため、2・3 層が認められず、盛土直下で 4 層を確認した。いずれの調査区も遺構は 4 層上面で検出した。遺構面の標高はいずれも T.P.+16.1 m 程度である。

2. 各調査区の遺構と遺物

HKA16-4 (図29・32・図版10~12)

東西 2.5 m × 南北 3 m (7.5 m²) の調査区を設定した。4 層を切り込む溝 1 条 (SD1) と、溝の埋土をベース面とするピット 3 基 (SP1 ~ 3) を検出した。SD1 は「L」字状に屈曲し、調査区の大半が遺構内に収まる。深さ 0.5m を測り、断面形状は台形状を呈する。その形状から人為的なものと考えられるが、北及び東側に延び、他の調査区では検出しなかったため、詳細は不明である。遺物は出土していない。

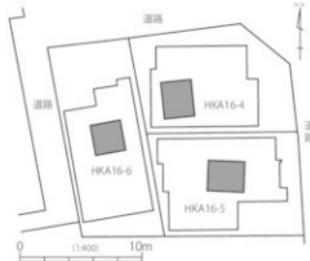
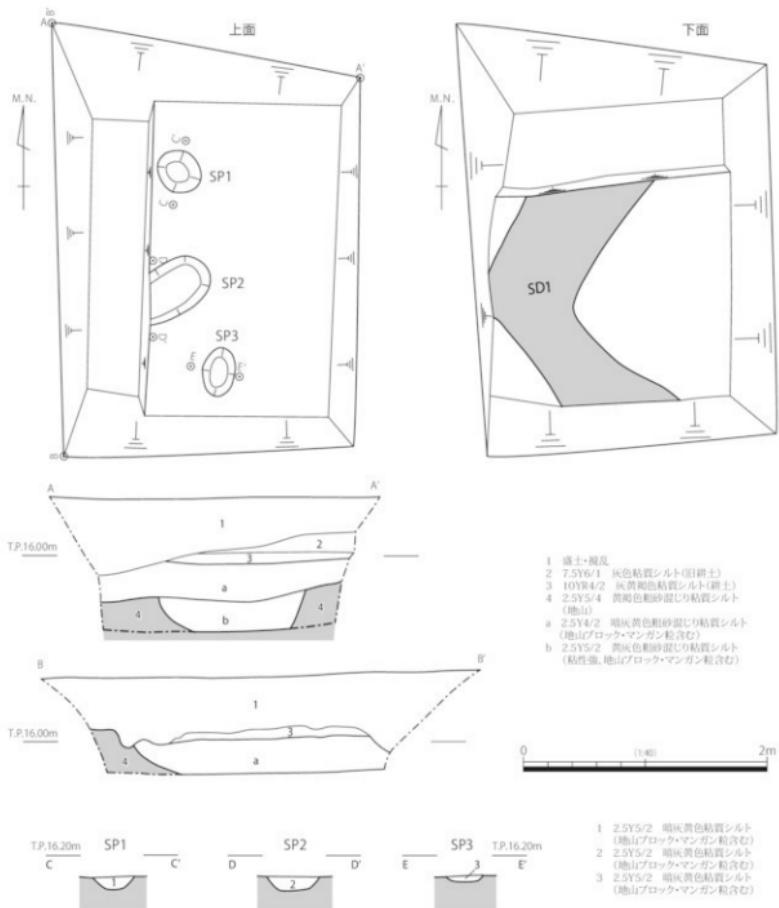


図27 HKA16-4・5・6 調査区位置図



図28 HKA16-4・5・6 調査地周辺図

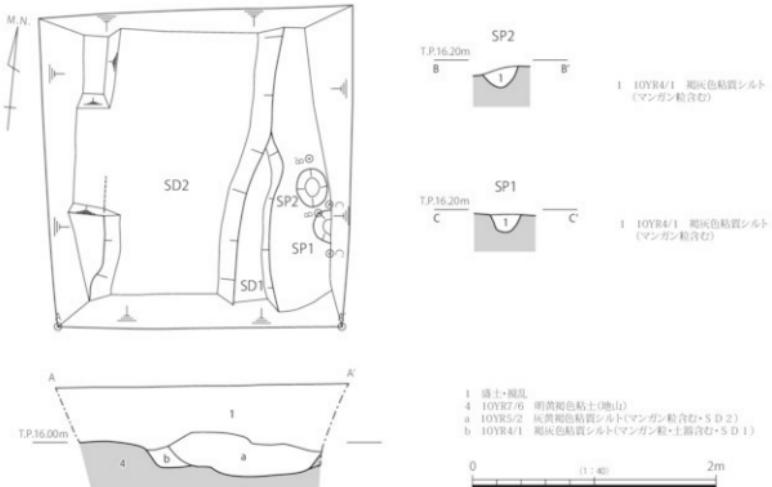
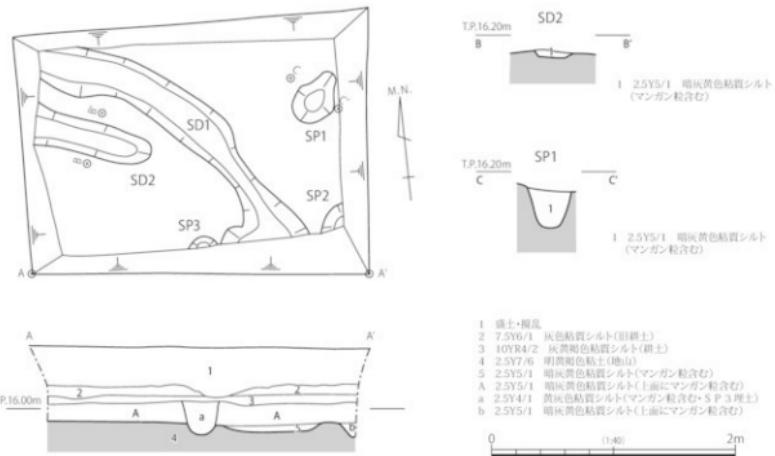


SP1は直径0.3m・深さ0.1mを測る。遺物は瓦器が出土した。SP2は長径0.5m以上・短径0.4m・深さ0.12mを測る。遺物は瓦器・土師器が出土した。SP3は長径0.4m・短径0.3m・深さ0.04mを測る。遺物は土師器が出土した。

出土遺物はいずれも小片であり、図化できたものは、SP1出土の瓦器底のみである。28は高台径3.8cm・残存高0.9cmを測る。断面三角形状の低い貼り付け高台をもつ。内面に暗文を施し、外間に指頭圧痕が認められる。和泉型III-3～IV-1～2期頃（13世紀前半）と思われる。

HKA16-5（図30・32・図版11・12）

東西3m×南北2.5m(7.5m²)の調査区を設定した。調査区南側にのみ黄灰色粘質シルト（層厚0.25



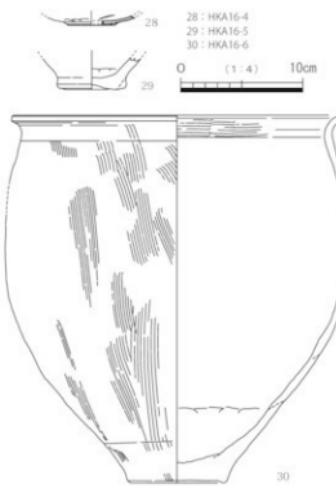


図32 出土遺物実測図（HKA16-4・5・6）
SD1は南北方向に延びる溝である。長さ1.3m以上・幅0.26m以上・深さ0.16mを測り、SD2に西側を切られる。本溝より弥生土器壺1個体分（30）がまとまって出土した。30は弥生土器壺である。口径26.8cm、器高30.15cm、底径7.6cm、体部最大径は中央部に位置し、14.1cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は面を成す。底部は輪状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、体部外面に粗いタテハケ、口縁部内面に粗いヨコハケ、体部内面にナデを施す。底部内面は剥離が著しく、凹凸が目立つ。弥生時代前期後半（折津I-4様式）である。SD2は南北方向に延びる溝である。長さ2.2m以上・幅1.2m・深さ0.36mを測り、SD1を切る。

3.まとめ

今回の調査ではいずれの調査区においても比較的浅い深度（現GL-0.4～0.6m・T.P.+16.1m程度）で地山面に到達し、それぞれ遺構を検出した。遺物が出土し、時期の明らかなものとして弥生時代と中世の遺構がある。周辺は既往の調査例が少ないが、遺構は周辺に広がっていることが十分予想され、今後も注意が必要である。

[参考文献]

森田克行 1990 「折津地域」「弥生土器の様式と編年」近畿編Ⅱ 木耳社

中世土器研究会 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」

時期は決定しがたい。

4層上面でビット3基（SP1～3）、溝2条（SD1・2）を検出した。いずれの遺構からも遺物は出土していないため、時期は不明である。SP1は長径0.5m・短径0.3m・深さ0.3m、SP2は直径0.2m以上・深さ0.14mを測る。SP3は黄灰色粘質シルトを切りこんでいることを壁面で確認した。長径0.24m・短径0.1m以上・深さ0.26mを測る。SD1・2は北西～南東方向に平行して延びる溝である。SD1は長さ1.6m以上・幅0.2m・深さ0.1m、SD2は長さ0.5m以上・幅0.16m・深さ0.08mを測る。

HKA16-6（図31・32・図版11・12）

2.5m四方（6.25m²）の調査区を設定した。4層上面でビット2基（SP1・2）、溝2条（SD1・2）を検出した。遺物はSD1からのみ出土した。

SP1は長径0.26m・短径0.14m・深さ0.14m、SP2は長径0.3m・短径0.26m・深さ0.16mを測る。

SP1は長径0.26m・短径0.14m・深さ0.14m、SP2は長径0.3m・短径0.26m・深さ0.16mを測る。

SD1は南北方向に延びる溝である。長さ1.3m以上・幅0.26m以上・深さ0.16mを測り、SD2に西側を切られる。本溝より弥生土器壺1個体分（30）がまとまって出土した。30は弥生土器壺である。

口径26.8cm、器高30.15cm、底径7.6cm、体部最大径は中央部に位置し、14.1cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は面を成す。底部は輪状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、体部外面に粗いタテハケ、口縁部内面に粗いヨコハケ、体部内面にナデを施す。底部内面は剥離が著しく、凹凸が目立つ。弥生時代前期後半（折津I-4様式）である。SD2は南北方向に延びる溝である。長さ2.2m以上・幅1.2m・深さ0.36mを測り、SD1を切る。

第5節 溝昨遺跡 (MZK16-2)

調査地 五十鈴町241番6

調査期間 平成28年9月21日

調査面積 6.25m²

調査担当 木村健明

1. 調査結果 (図33～35・図版13)

はじめに 五十鈴町において計画された個人住宅の建築に伴い、2.5m四方の調査区を設定し、本発掘調査を行った。

基本層序 現地表面の標高はT.P.+7.5mである。層序は上層から1層（盛土・層厚0.6m）、2層（黄褐色粗砂混じり粘質シルト・層厚0.2m）、3層（暗灰黄色粘質シルト・層厚0.3m）、4層（暗灰黄色粘質シルト（灰色粘土ブロック混じり・層厚0.2m）、5層（灰オリーブ色粘質シルト・層厚0.2m）、6層（灰色粘土・層厚0.2m）、7層（灰白色粗砂混じり粘質シルト（上面に鉄分が沈着する・層厚0.3m）、8層（青灰色粘土・層厚0.3m以上）である。

遺構・遺物 T.P.+5.8m（7層上面）で溝1条（SD1）を確認した。溝は東西方向に延びるが、南側は調査区外となるため幅は不明である。湧水が著しく人力での掘削は困難であったため、重機による断ち割りを行った。その結果、溝は深さ約0.3mを測り、断面形状は台形状を呈することを確認した。埋土中からは土師器の小片が出土した。ただし、詳細な時期は不明である。

また、遺構上面を覆う第6層中から、土師器・須恵器の小片が出土した。これらも詳細な時期は不明である。遺物は層の色調や土質及び散発的な遺物の包含状態から、二次的に流れ込んだものと考えられる。

盛土直下及び、第2層上面において粗砂で埋まった落ち込みが存在することを確認したが、遺物を含まないため時期は不明である。

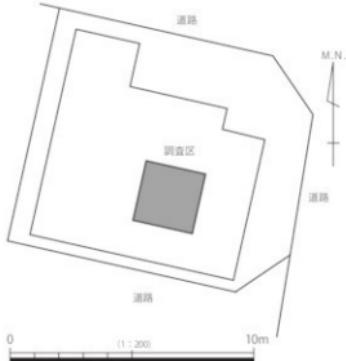


図33 調査区配置図



図34 調査地周辺図

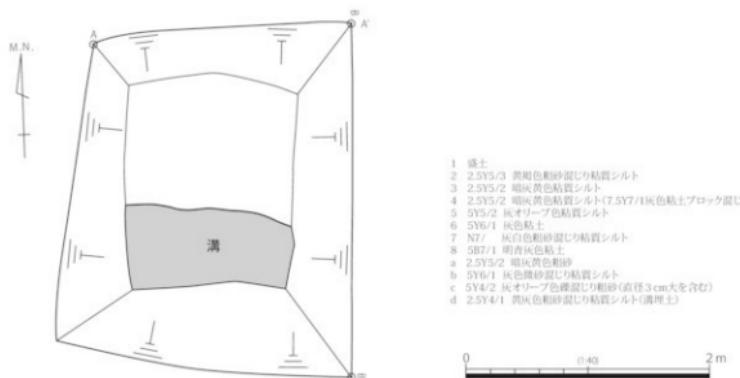


図 35 平・断面図

まとめ 調査地周辺では、北側 50 m に位置する市道建設時に調査が行われ、弥生時代・古墳時代及び中世の遺構・遺物が確認されている。今回の検出深度は GL-1.8m とやや深いため、周辺が既に宅地化している現状下での住宅建築に伴う小規模な調査では遺構の詳細な様相を把握しづらい可能性が高い。しかし、遺構は良好に遺存していると思われ、調査例を積み重ねていくことが重要であろう。

第6節 千提寺菱ヶ谷遺跡（第三次範囲確認調査・SDH16-1）

調査地 茨木市大字千提寺36番8
 （平成27年12月28日付番地変更）
 調査原因 史跡指定に向けた範囲確認調査

調査期間 平成28年5月30日～9月2日
 調査面積 約80m²
 調査担当 坂田典彦

1. 調査結果

（1）調査に至る経緯と経過

本遺跡における調査の端緒および経緯は、先の第一・二次範囲確認調査報告において詳述したため〔茨木市教育委員会 2016〕、本項では時系列を例挙するかたちで略述していく（以下、調査名称の「範囲確認」を略す）。千提寺地区交流拠点広場の建設に先立ちはじめて埋蔵文化財調査のメスを入れた当該地では、平成 26 年 9 月に試掘調査を実施し、同年 11 月に新規発見「千提寺菱ヶ谷遺跡」として登録された。これを受け、本市教育委員会は同年 11 月～翌 27 年 3 月に第一次調査を、平成 27 年 4 月～8 月に第二次調査を実施し、人骨が遺存する土壇墓や遺跡最高所で検出した大型土坑の調査をはじめ、遺跡全体を視野に入れたテラス面の形成についても確認した。また、本遺跡は平成 28 年 1 月に土地所有権が茨木市に移ったのを機に、都市公園としての位置づけを担っている。

今年度は、上記の期間で第三次調査を、平成 29 年 1 月～3 月に第四次調査を実施した。なお、平成 28 年 7 月 28 日には、第三次調査の成果とこれまでに分かった自然科学分析結果を広く市民の方々に供するために現地説明会を実施した。この間、本市教育委員会は大阪府教育委員会文化財保護課および本市文化財保護審議委員の指導・教示を受けつつ、調査方針を定めていった。

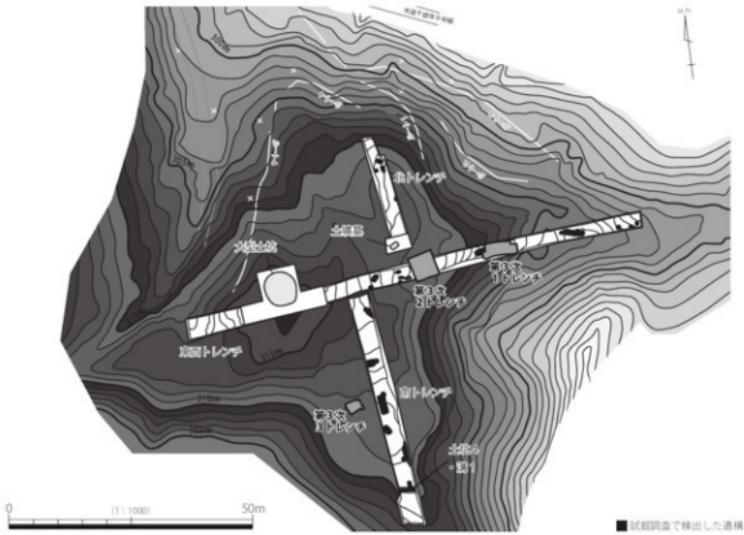


図 36 トレンチ配置図・遺構配置図

(2) 調査の方法と目的

第三次調査は、試掘調査で検出した20基を超える遺構の内、炭化物埋納土坑と礫集積土坑の調査を実施した。さらに試掘トレンチからは外れているが、現地表面に加工石材の密集が確認されていた箇所(3トレンチ)も併せて確認した。これらの遺構を抽出した目的は、炭化物の年代測定や樹種同定を実施することによって遺構の帰属年代を確定し且つ、遺構機能時期の植生や古環境を復元することにある。

礫集積土坑は第二の土壤墓の可能性も予期されたため実施した。

なお、今次調査もこれまでと同様に、遺構の平面規模や形態を確認し、遺構の一部を掘削することによって全容を把握するという方法で実施し、向後の検証余地を残すべく未発掘部分を残す目的を意識した。

(3) 調査の成果

① 基本層序

基本層序は、第一・二次調査と対比させており、詳細観察記録は(茨木市教育委員会 2016)に委ね、ここでは基本層序の概略を再掲する。本遺跡の層序は大別で4層に分層でき、現地表面を含む表土・腐植土および試掘埋め戻し土(1層)、3層を母材とする斜面地の表層堆積層・斜面堆積層(2層)、地山(3層、無遺物層)、そして当遺跡の基盤岩(4層、花崗岩体)である。したがって、遺構の帰属層位は3層であり、遺構面は3層上面に当たる。

② 遺構(図37~39、図版14)

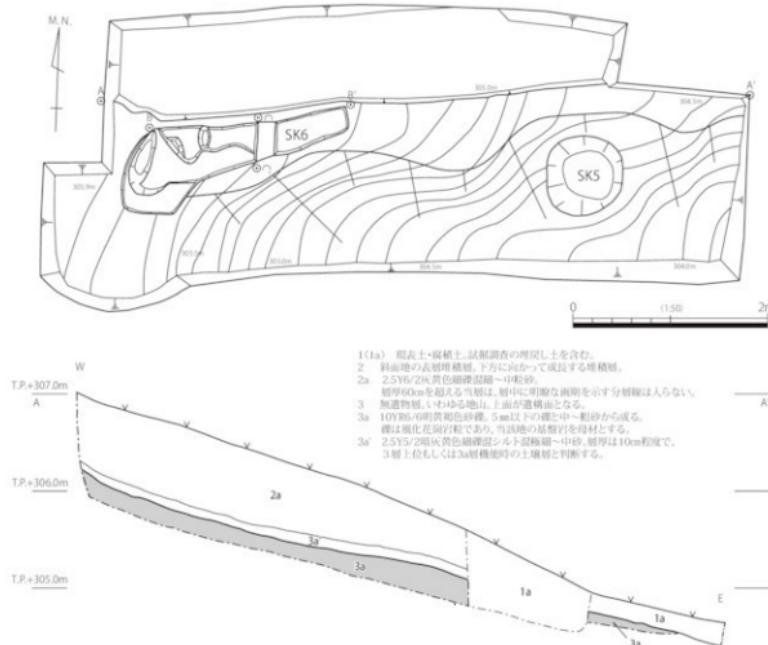
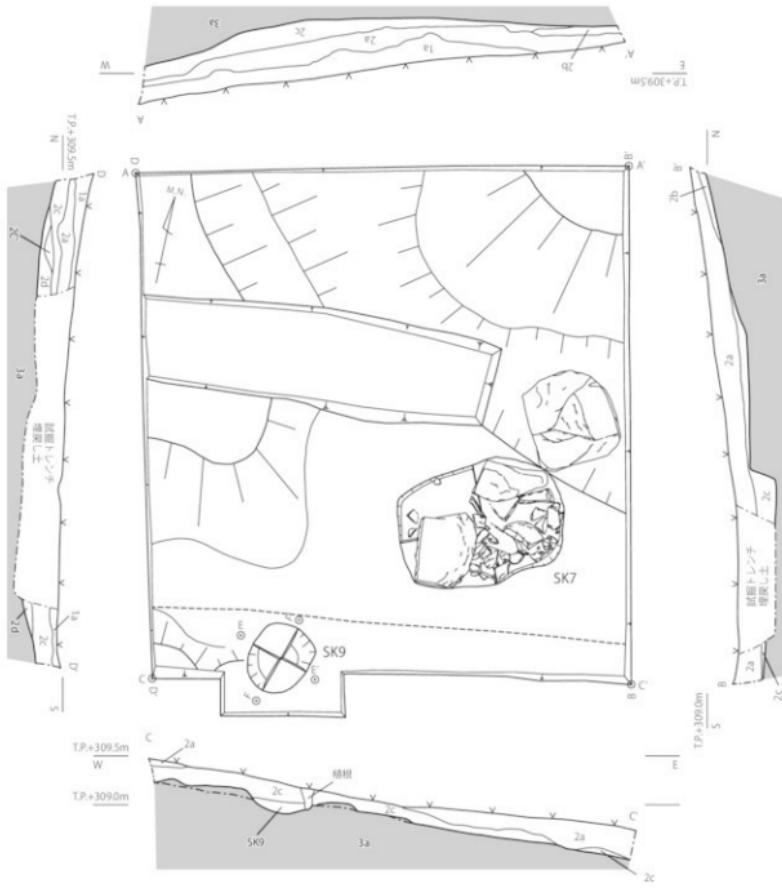
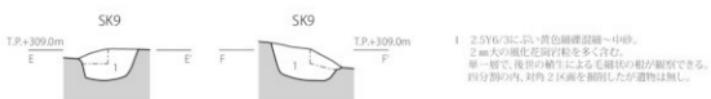


図37 1トレンチ平・断面図



- 1(1a) 現表土・腐植土、試掘時の埋廻し土を含む。
 2 斜面地の表面堆積層。下方に向かって成長する堆積層。
 2a 2.5Y6/2a 黄色細粒泥層～中砂層。
 2b 3Y6/2b 黄色細粒泥層～中砂層のものがあり。
 2c 3Y6/2cオーラープ色細粒泥層。
 2d 2.5Y5/2d灰黄色細粒泥層～中砂、3層の再堆積層。
 3a 1トレンチ3a層と同じ。

0 10m 20m



I 2.5Y6/3aに2a・黄色細粒泥層～中砂。
 2a 多量の細化花崗岩粒を多く含む。
 3a層で、後世の植生による毛細状の根が観察できる。
 四分割内の、対角2区画を照合したが遺物は無し。

図38 2トレンチ平・断面及びSK9断面図

今回調査した遺構には、1トレンチの炭化物埋納土坑（SK5）と不定形土坑（SK6）、2トレンチの砾集積土坑（SK7）と円形土坑（SK9）の計4基があり、これに3トレンチの加工石材の集積場が加わる。3トレンチの加工石材はCタイプの矢穴痕をもつ削石であるが、帰属層位から二次移動していることが分かった。ここでは、上記の遺構の内、SK5とSK7に的を絞って記述する。

炭化物埋納土坑 東に下る主要尾根付近で検出した当遺構は、標高304.3～304.6mに立地する。図37・41の等高線が示すように、具体的には尾根上テラス面からは外れ、遺跡の地形を規定する南東谷

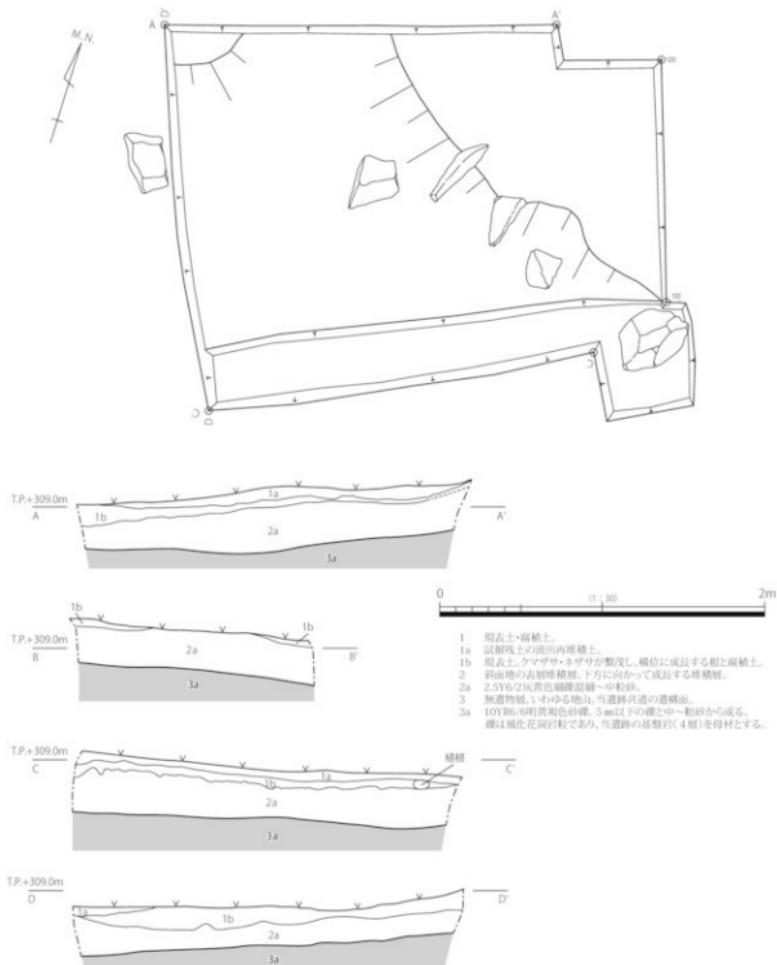


図39 3トレンチ平・断面図

筋斜面に差し掛かっている。平面は径80cmの円形を呈し、深さは最大20cmを測る。埋土は2層に分けられ、下層である第2層は層厚6cmを測る炭化物層である。当層は底面全体にわたって観察でき、炭化物片は数mm大のものから1cmを超えるものまで遺存しており、樹種同定と年代測定の試料を採取した。次いで、遺構底面には被熱痕跡を確認することができた。また、第1層内には遺構壁面の崩落に際して混入した被熱土や焼土のブロックが観察できたことから、当遺構内で火を熾していたことは明白であり、他所で燃やした燃焼滓の片づけ土坑の類ではないことは特記しておきたい。遺構の性格や帰属時期については、炭化物の分析結果を待って、今後考察を要するが、現段階では立地や形状から炭焼窯（坑内製炭遺構）が想定される。

礫集積土坑 人骨が遺存していた土壤墓と近接し、同一テラス上に立地する当遺構は、墓壙の可能性も示唆された土坑であるが、結果的には浅く掘りこぼめた土坑に割石が集積する、いわゆる採石土坑と判明した。平面面等の法量は図41に委ねるが、平面形状は東西に長軸をもつ梢円形で、断面形状は浅い皿形を呈する。埋積する花崗岩の端石は層状に堆積し、Cタイプの矢穴痕が数多く確認できた。近世中頃以降に目的石材を獲得する際に構築された土坑である。

③遺物（図40）

表探した寛永通寶（31）は3期の新寛永〔永井編 1998〕である。錢徑約2.3cm、方形組通し孔一辺0.5



31

図40 錢貨拓影

（S= 2 / 3）

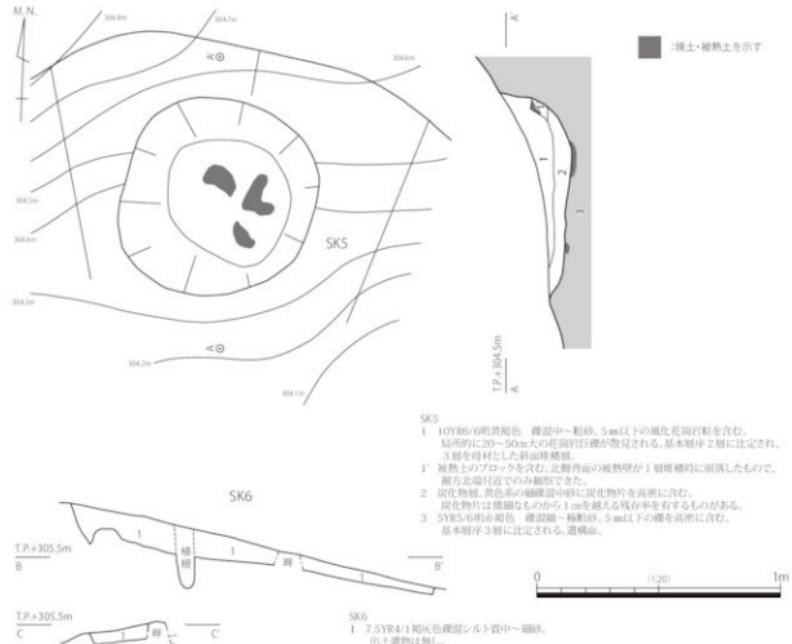
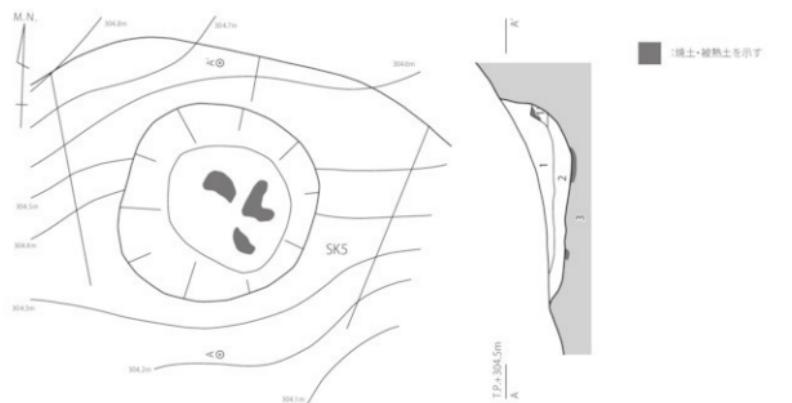
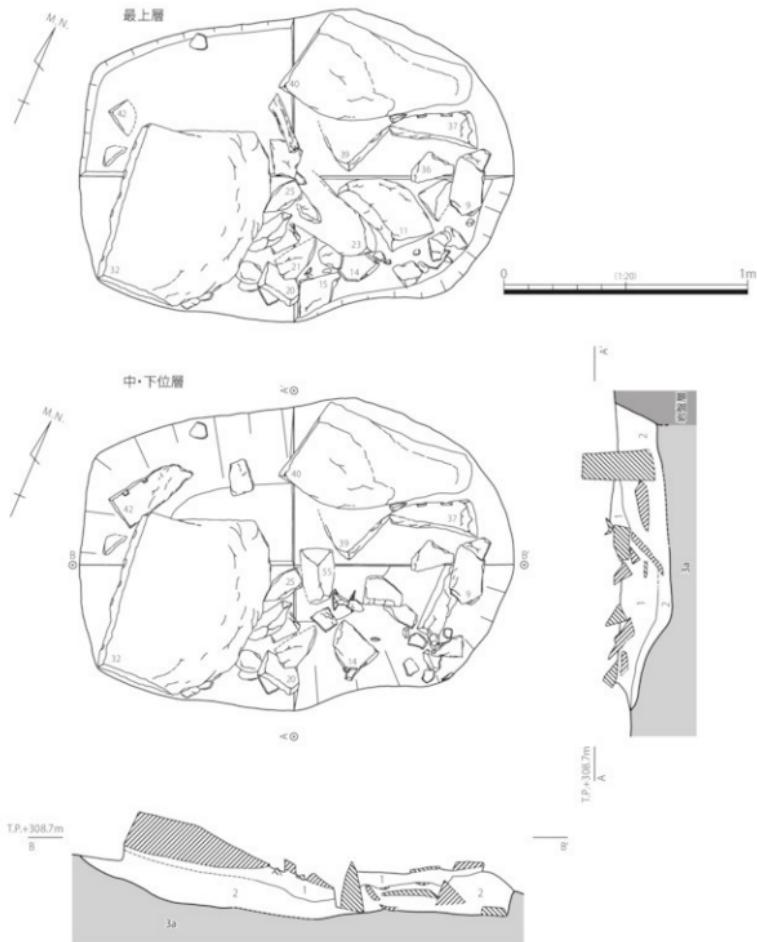


図41 1トレンチSK5平・断面及びSK6断面図



1 T.SYR4/2灰褐色有機質シルト混中砂、木片や落葉等の腐植物を含む。遺構南東部のコッパ材密集部分に堆積する。
2 初開墾土。SY8/2灰白色中～輕砂。
3a 1トレンチ3a層と同じ。

図42 2トレンチSK7 平・断面図

cm、厚さ 0.8cm である。「寛」字の 12 画と 13 画の頭が離れ、「寶」字末画が「ハ貝寶」である。したがって、18世紀以降の所産と考えてよい。

(4) おわりに

紙幅が尽きたことから雑駁なまとめとなるが、今次調査によって墓域以外の新たな性格を見いだせたことは、今後の調査目的や方針を決める上で一助となった。

2. 千提寺墓ヶ谷遺跡出土の人骨の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

分析試料は、以前同定を実施した SK1 の出土の人骨のうち、頭蓋骨（破片 3 個、2g）と歯 3（右下顎第一小白歯、0.9g）の 2 点である。

(2) 分析方法

試料は、前処理としてコラーゲン抽出 (CoEx) を行う。表面を物理的に洗浄した試料を 0.2M の水酸化ナトリウムに浸して、着色が無くなるまで液を交換し、フミン酸等を除去する。中性になるまで超純水で洗浄したあと、凍結乾燥させ、粉碎する。試料を透析膜に入れて 1M の塩酸を加え、加熱することによって骨の主成分であるリン酸カルシウムを除去する。透析膜内の内容物を遠心分離機を用いて濃集したあと、超純水で加熱・洗浄する。試料を濾過した後、濾液を凍結乾燥させコラーゲンを得る。

精製された試料を燃焼して CO_2 を発生させ、真空ラインで精製する。さらに、鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。

曆年較正に用いるソフトウェアは、Oxcalv.4.2.4、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。

(3) 結果・考察

結果を表 1、図 44 に示す。同位体補正を行った年代値は、頭蓋骨が 60 ± 20 yrs BP、歯が 110 ± 20 yrs BP である。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、曆年代に近づける手法である。較正のもととなる直線は曆時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13 (Reimer et al., 2013) である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回は Oxcal を用いる。

なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	種別	分析方法	補正年代BP (曆年較正)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	曆年較正年代				Code No.		
						年代値	相対比	中央値				
SK1 頭蓋	CoEx	60 ± 20 (64 ± 22)	$-22, 23 \pm 0, 28$	20 ± 20	n	cal AD 1706 - cal AD 1720	cal BP 244 -	230	0.124	cal AD	IAAA-	
						cal AD 1820 -	cal AD 1833	cal BP 130 -	117	0.103	1884	153040
						cal AD 1882 -	cal AD 1914	cal BP 68 -	36	0.456		
	2 σ					cal AD 1695 -	cal AD 1728	cal BP 255 -	222	0.235		
						cal AD 1812 -	cal AD 1854	cal BP 138 -	96	0.190		
						cal AD 1867 -	cal AD 1919	cal BP 83 -	31	0.549		
SK1 歯3	CoEx	110 ± 20 (113 ± 23)	$-20, 29 \pm 0, 32$	40 ± 20	n	cal AD 1692 - cal AD 1710	cal BP 258 -	240	0.105	cal AD	IAAA-	
						cal AD 1717 -	cal AD 1728	cal BP 233 -	222	0.064	1838	153041
						cal AD 1812 -	cal AD 1890	cal BP 138 -	60	0.456		
	2 σ					cal AD 1910 -	cal AD 1920	cal BP 40 -	30	0.027		
						cal AD 1682 -	cal AD 1736	cal BP 268 -	214	0.227		
						cal AD 1805 -	cal AD 1905	cal BP 145 -	10	0.677		

1) 計算には、Oxcal v4.2.4を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4) CoExはコラーゲン抽出装置を示す。

5) 曆年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

6) 1桁目を丸めるのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

7) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma = 68\%$ 、 $2\sigma = 95\%$ である8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれ真の値が存在する確率を示したもの。

9) 中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したもの。

10) 2点ともに計測の範囲外にあるとの警告が出る。

OxCal v4.2.4 Brook Ramsey (2013); r5_1ntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

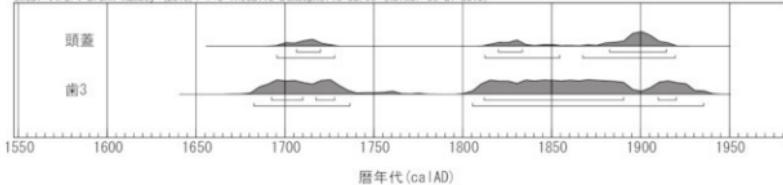


図43 曆年較正結果

2σ の曆年較正值は、頭蓋骨が cal AD 1,700 ~ 1,920、歯が cal AD 1,690 ~ 1,940 である。年代値の幅が大きいのは江戸時代以降の曆年較正曲線が大きく上下に変動しているからである。また、計算結果に「較正曲線の範囲外にある」との警告が出ていることから、誤差範囲の一部が基準値である 1950 年を超えていている。

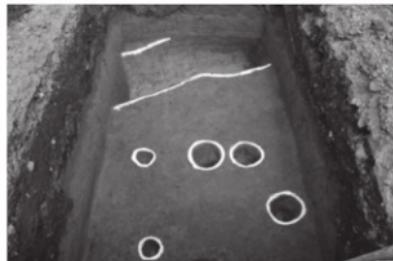
今回の試料は、同一個体の人骨と考えられているが、補正年代をみると値に開きがある。一方で測定年代をみると 20 ± 20 yrs BP、 40 ± 20 yrs BP と双方の誤差範囲に収まっている。補正年代の差は、 $\delta^{13}\text{C}$ の値がやや異なるため、同位体補正の年代の差になって現れているのが原因である。動物のコラーゲンは、食物中のタンパク質の同位対比より炭素では +4.5‰の大きさで重い同位体が濃縮する（伊達ほか 2009）。これにあてはめると、陸上の植物食中心の人間ならば、-20 ~ 23‰あたりに収まることがあるので、今回の値は人骨としては通常の値の範囲内に収まる。一体の人骨で開きができる理由は不明であるが、コラーゲンの保存状態や汚染等が影響している可能性がある。どちらの値が保存状態や汚染が少ないかは、 $\delta^{15}\text{N}$ や C/N 比を測定して細かく見ていく必要があるが、今回得られた $\delta^{13}\text{C}$ の値であれば、誤差の範囲とみても問題ないであろう。

以上のことから、今回の年代測定によって、人骨については、江戸時代前期以降であることが確認される。較正年代の中央値にもとづくと、可能性のある年代値としては、幕末～明治時代頃があげられる。

ただし、上記した江戸時代以降の歴年較正曲線の変動の大きさをふまえると、現段階で言及できる確からしい人骨の年代としては、江戸時代前期以降から第二次世界大戦終結以前と大きな幅で捉えるのが適切と考えられる。

引用文献

- 伊達元成・青野友哉・大島直行・松田宏介 2009 「陸産・海産の食料資源摂取率を人骨の炭素14年代から求める試み」『総研大文化科学研究5』 69-80
- Reimer PJ,et al.2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP.Radiocarbon,55,1869-1887.
- Stuiver Minze and Polach A Henry,1977,Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon,19,355-363.



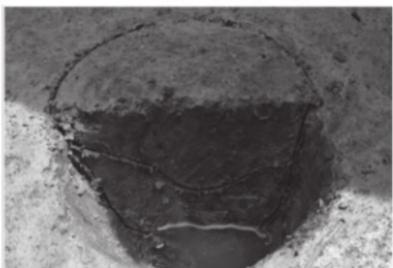
1. IBK16-3 完掘状況全景（西から）



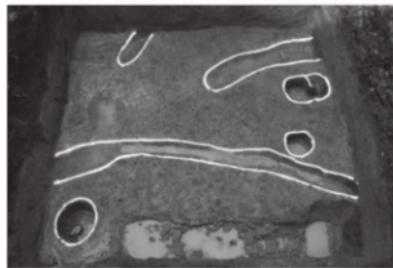
2. IBK16-3 調査区北壁断面（南から）



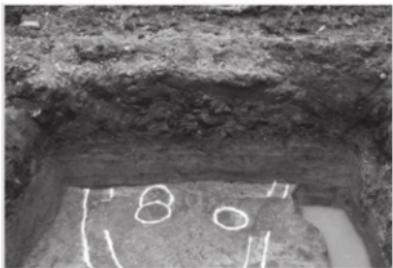
3. IBK16-3 SD1 断面（南から）



4. IBK16-3 SP1 断面（北西から）



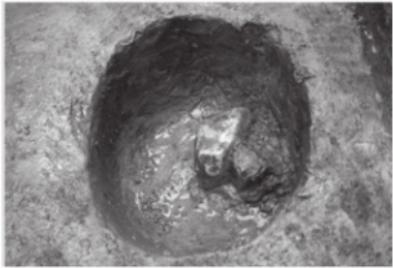
5. IBK16-8 完掘状況全景（南から）



6. IBK16-8 調査区東壁断面（西から）



7. IBK16-8 調査区北壁断面（南から）



8. IBK16-8 SP4 遺物検出状況（北から）



1. IBK16-7 完掘状況全景（南から）



2. IBK16-7 調査区南壁断面（北から）



3. IBK16-7 SD2 断面（東から）



4. IBK16-7 SD2 出土遺物



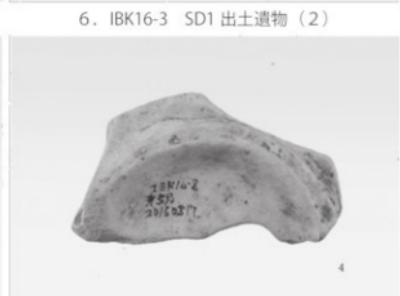
5. IBK16-3 SD1 出土遺物（1）



6. IBK16-3 SD1 出土遺物（2）



7. IBK16-3 SD1 出土遺物（3）

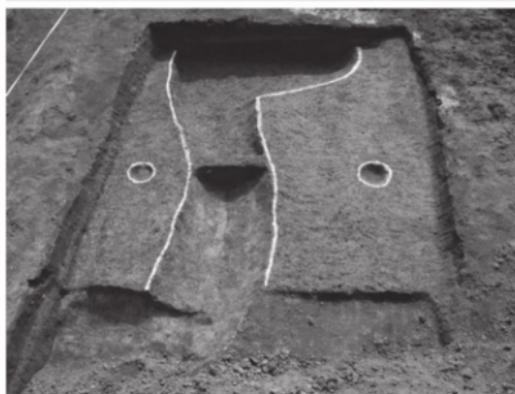


8. IBK16-8 SP4 出土遺物

図版
良奈
良
遺
跡



1. HN16-9
調査区北半部完堀状況（南から）



2. HN16-9
調査区南半部完堀状況（北から）



3. HN16-9
調査区北壁断面（南から）



1. HN16-9 SD 1出土遺物

図版

都道

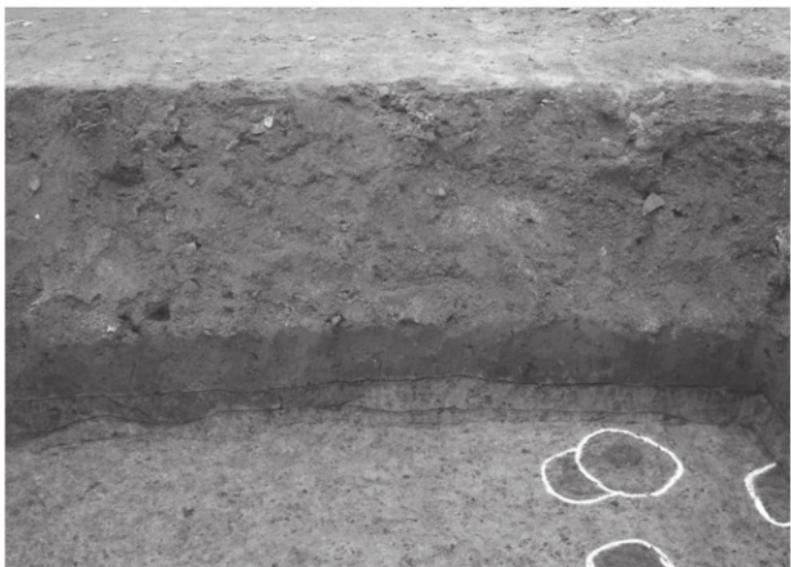
跡



1. KOR15-7 調査区東半部完堀状況（南から）



2. KOR15-7 調査区西半部完堀状況（南から）



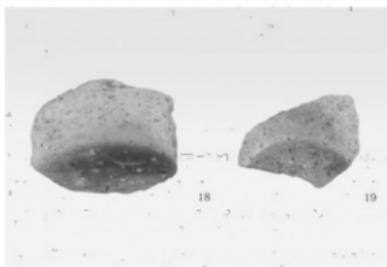
1. KOR15-7 南壁土層断面（北から）



2. KOR15-7 SP3 遺物出土状況（南から）



3. KOR15-7 SP31・32 土層断面（北から）



4. KOR15-7 SK1、SP17 出土遺物

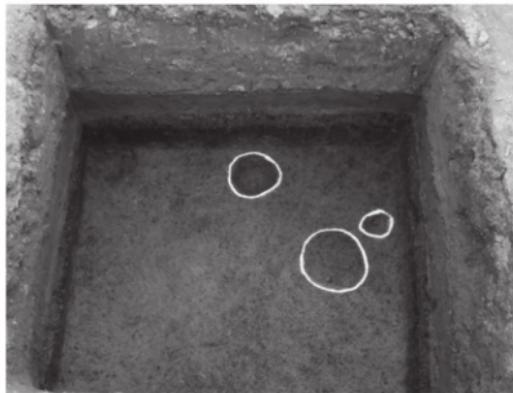


5. KOR15-7 SP3 出土遺物

図版

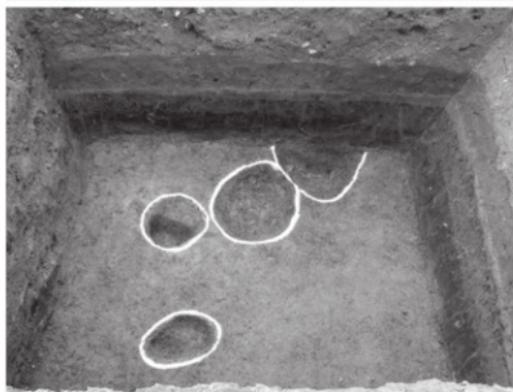
遺跡

跡



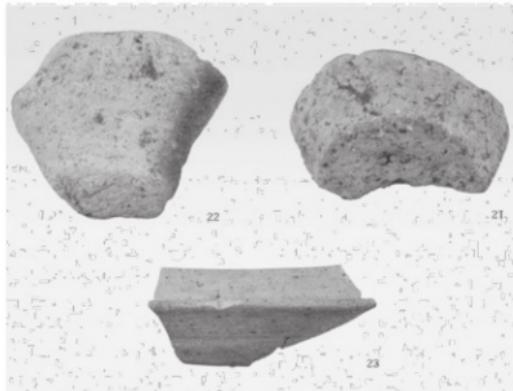
1. KOR15-8

調査区東半部完堀状況（西から）



2. KOR15-8

調査区西半部完堀状況（北から）



3. KOR15-8

遺物包含層出土遺物

1. KOR16-3
完堀状況（南から）



2. KOR16-3
南壁断面（北から）



3. KOR16-3
SP3、SD2 出土遺物



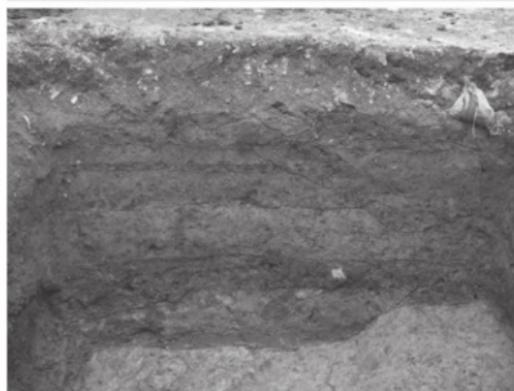
図版

都道

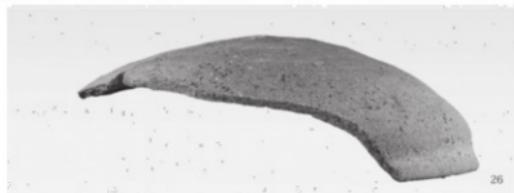
跡



1. KOR16-4
完堀状況（北から）



2. KOR16-4
南壁断面（北から）



26



27

3. KOR16-4
SD1、包含層出土遺物



1. HKA16-4
完堀状況（北から）



2. HKA16-4
溝検出状況（南から）



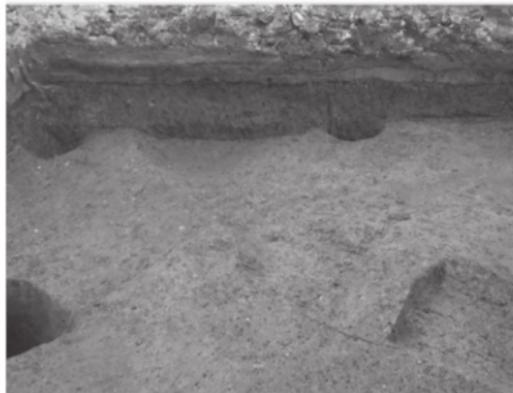
3. HKA16-4
北壁断面（南から）



1. HKA16-4
西壁断面（東から）



2. HKA16-5
完堀状況（東から）



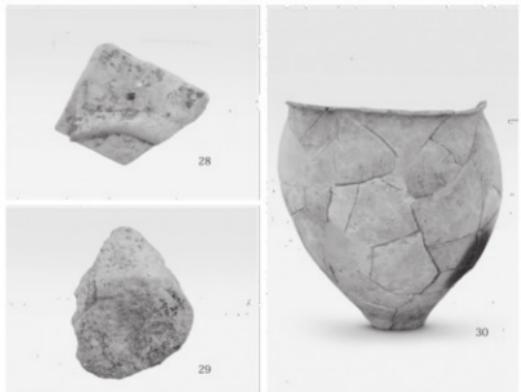
3. HKA16-5
南壁断面（北から）



1. HKA16-6
完堀状況（西から）



2. HKA16-6
南壁断面（北から）



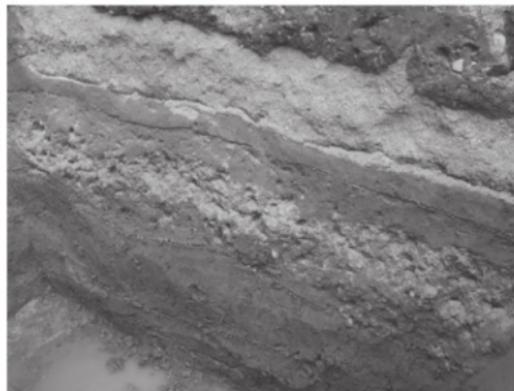
3. HKA16-4～16-6 出土遺物

溝
昨

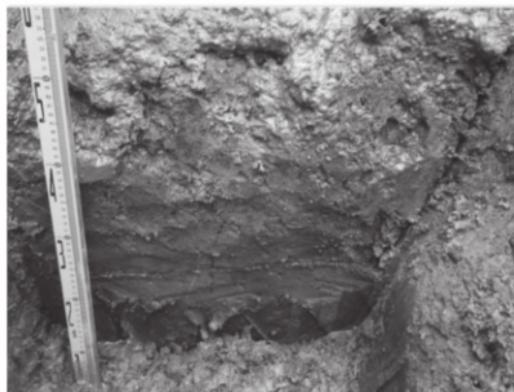
遺
跡



1. MZK16-2
遺構面検出状況（西から）



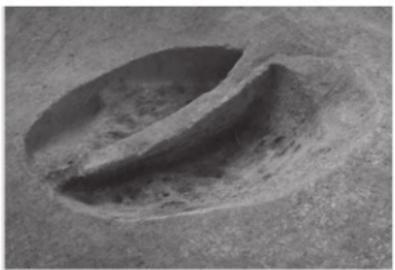
2. MZK16-2
東壁断面（西から）



3. MZK16-2
遺構断面（東から）



1. 1 トレンチ遺構検出状況（東から）



2. 1 トレンチSK5断面（南東から）



3. 1 トレンチSK6完堀状況（北から）



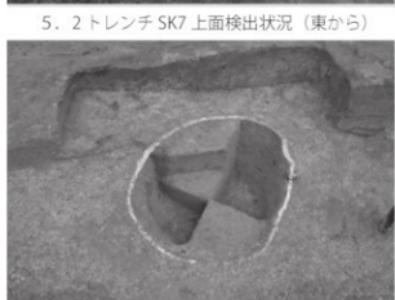
4. 2 トレンチ遺構検出状況（西から）



5. 2 トレンチSK7上面検出状況（東から）



6. 2 トレンチSK7半裁状況（南から）



7. 2 トレンチSK9半裁状況（北から）



8. 3 トレンチ完堀状況（南東から）

報告書抄録

ふりがな	八いにじゅうはんねんざいばらきしまいぞうぶんかざいはくつちょうさいはときゅう一にほくほじょぎょうにともなうはくつちょうさ一
書名	平成28年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報9—国庫補助事業に伴う発掘調査—
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第68集
編著者	川村和子、木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	平成29年(2017)3月31日

所取遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
茨木遺跡〔IBK16-3〕	片桐町	34° 81' 97"	135° 57' 00"	H28.5.24	6m ²	
茨木遺跡〔IBK16-7〕	片桐町	34° 81' 97"	135° 57' 00"	H28.7.29	9m ²	
茨木遺跡〔IBK16-8〕	片桐町	34° 81' 97"	135° 57' 00"	H28.8.17	9m ²	
東奈良遺跡〔HN16-9〕	奈良町	34° 80' 61"	135° 56' 60"	H28.10.25・26	18m ²	
郡遺跡〔KOR15-7〕	郡五丁目	34° 83' 51"	135° 55' 55"	H28.3.7・8	8m ²	
郡遺跡〔KOR15-8〕	郡五丁目	34° 83' 51"	135° 55' 55"	H28.3.7～10	9m ²	
郡遺跡〔KOR16-3〕	郡四丁目	34° 83' 05"	135° 55' 72"	H28.11.29	6.25m ²	
郡遺跡〔KOR16-4〕	郡四丁目	34° 83' 05"	135° 55' 72"	H28.11.30	6.25m ²	
倍賀遺跡〔HKA16-4〕	春日五丁目	34° 82' 45"	135° 56' 23"	H28.9.27	7.5m ²	
倍賀遺跡〔HKA16-5〕	春日五丁目	34° 82' 45"	135° 56' 23"	H28.9.27	7.5m ²	
倍賀遺跡〔HKA16-6〕	春日五丁目	34° 82' 45"	135° 56' 23"	H28.9.28	6.25m ²	
溝堀遺跡〔MZK16-2〕	五十鈴町	34° 81' 41"	135° 58' 86"	H28.9.21	6.25m ²	
千提寺菱ヶ谷遺跡 〔SDH16-1〕	大字千提寺	34° 53' 04"	135° 31' 56"	H28.5.30～9.2	50m ²	範囲確認

所取遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
茨木遺跡〔IBK16-3〕	集落跡	古墳	ピット、溝	弥生土器、須恵器	
茨木遺跡〔IBK16-7〕	集落跡	古墳	ピット、溝	土師器	
茨木遺跡〔IBK16-8〕	集落跡	古墳	ピット、溝	土師器、瓦器	
東奈良遺跡〔HN16-9〕	集落跡	弥生・古墳	ピット、溝	土師器、須恵器、土鍬	
郡遺跡〔KOR15-7〕	集落跡	弥生・古墳	ピット、溝	弥生土器、土師器	
郡遺跡〔KOR15-8〕	集落跡	弥生・古墳	ピット、溝	弥生土器、須恵器	
郡遺跡〔KOR16-3〕	集落跡	弥生・古墳	ピット、溝	弥生土器、須恵器	
郡遺跡〔KOR16-4〕	集落跡	弥生・古墳	ピット、土坑、流路	弥生土器、埴輪	
倍賀遺跡〔HKA16-4〕	社寺跡	古墳	柱穴、溝	土師器、瓦器	
倍賀遺跡〔HKA16-5〕	社寺跡	古墳	柱穴、溝	弥生土器、土師器、須恵器	
倍賀遺跡〔HKA16-6〕	社寺跡	古墳	柱穴、溝溝	弥生土器	
溝堀遺跡〔MZK16-2〕	集落跡	弥生～平安	溝	土師器、須恵器	
千提寺菱ヶ谷遺跡 〔SDH16-1〕	その他の墓	中世・近世	炭化物理納土坑 罐集積土坑	錢貨、花崗岩削石	

茨木市文化財資料集 第68集

平成 28 年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 9

—国庫補助事業に伴う発掘調査—

発行日 平成 29 年 3 月 31 日

発 行 茨木市教育委員会

印 刷 株式会社トウユー